巨大娘いろいろ
短編集

作：ヘンリクト

『異世界転生したのに何のチート能力もない普通の女の子だったお話』

作：もんてすきゅー

「誕生日おめでとう。これでひとつ大人になったわね」
「本当に大きくなったな。父さんと母さんは嬉しいぞ」
私の名前はアンナ＝ドルトガルド。今日で十五歳になった普通の、いや、普通よりはちょっと可愛い女の子。好物のチキンにシンプルなケーキと、ほんのりアルコールが混じるぶどうのジュース。いつもより少しだけ豪勢なテーブルを囲み、目の前で優しく微笑んでいるのが、一人っ子である私に惜しみない愛を注ぎ込んで育ててくれたお父さんとお母さん。私は、このささやかな幸せを噛みしめていた。
「…うん。ここまで育ててくれてありがとう」
「ははっ。成人したと言ってもまだ子供みたいなもんだ。その言葉は嫁入りまで取っておいてくれ」
「よめっ…！？もう、お父さん！」
「ふふ。そんな先のことは置いといて、冷めないうちに食べちゃいましょ。お昼からお酒なんて何年ぶりかしら♪」
「お母さんも飲みすぎないでよねー！」

そう言って、神に感謝を捧げてから各々食事に手を付け始める。まさに家族団らんといった幸せを絵にかいたような食卓。本来なら夜にするのが当たり前だと思われる誕生祝いを昼にしてもらったのは私の希望。十五歳はこの国では形式的にとはいえ一人の大人と認められる年齢だ。今日の夜、どうしても一人の時間が欲しかった私は、数時間でも早く大人になりたかった。
（…段々と頭が冴えて情報の整理ができてきた。やっぱりここは…この世界は、私が居た世界じゃない）
端的に言ってしまえば、いわゆる”異世界転生”というやつなんだろうと思う。地球という星の、日本という国で、普通の女子高生として生きていた私。”元の世界”の記憶は曖昧だけど、それより大人の記憶はないから、やっぱり通学中にトラックにでも跳ねられちゃったのだろうか。かわいそうな私、と思わなくはないけど、どこか自分事のような他人事のような不思議な感覚。
（ここは剣と魔法の世界みたいだから…私にも何かチート級の能力があったりするのかな。うーん…でも途中で女神様に会ったような記憶はないし…まぁ、異世界で一般人として生きていくのも悪くはないかもしれないけど）
難しいことを考えながら、”こっちのお母さん”が作ってくれたチキンの照り焼きを美味しくもしゃもしゃ頬張

る。記憶を取り戻したのは今朝起きた時。おそらく、十五歳という年齢がカギだったんだろう。これからまだ色々と思い出していくのか、それともこれがすべてなのか。色々と考えたいから夜は空けておきたくて…

（あ、お酒美味しい。飲んじゃってもいいんだよね？こっちの世界では合法っぽいし）

品行方正な女子高生として人生の幕を閉じた私としてはこれが初めてのアルコールだ。比べたことがないからわからないけど、飲みやすいしほとんどジュースみたいに感じる。でもその中に少しだけ苦みみたいなのがあって、それがまた大人っぽくて、なんだか気分も良くなってきた。

（それに、世界が…揺れて…あれ、やっぱり酔って…）

「…なんか揺れてないか？」

「そうよね…お酒はかなり薄めたから酔うほどじゃ…」

揺れを感じてたのは私だけじゃないらしく、お父さんとお母さんもキョロキョロと周囲を見回している。私もつられるように周囲を見回していると、ついには棚の上にあった花瓶が床に落ちて割れる音が響き渡り、その揺れが気のせいではないと教えてくれた。

「この揺れに、鐘の音…まさか…」

「…そうね。〝あの日〟が来てしまったんだわ…」

街中でせわしなく打ち鳴らされ始めた襲撃を知らせる鐘の音。平和な街が一瞬にして様変わりしてしまうこの日を、こっちの世界の情報として私も知らないわけではない。

☆　☆　☆

「住民の皆さんは慌てず、安心して近くの建物に入ってください！王国軍が万全の体勢で事態に備えています！」

窓ごしに家の外を見てみれば、慌ただしく隊列を整えて城壁のほうへ向かう王国軍の兵隊さんたちが見える。逆に私たちのような一般人のほうが慌てることなく帰途についていて、本来なら逆なのになというそのギャップがなんだかおかしい。

「アンナ、せっかくの誕生日なのにすまないな」

「ううん。お父さんこそ、気を付けてね」

「ははっ。〝無死の名将〟と呼ばれているくらいだからな。今回も誰一人として死なせはしないさ」

「…途中になっちゃったし、夕飯にはまた、アンナの誕生日を祝いましょう」

そう言って抱き合ったお父さんとお母さんに私も横から抱きついた。お父さんを迎えに来た王国兵の人も少しだけ空気を読んで顔を逸らしてくれている。国の非常事態とはいえお休みが急になくなってしまうなんて大変だな、く

らいにしか感じていない自分が不思議だ。
「では行ってくる」
「行ってらっしゃい」
「…ねぇ、お母さん。十年前はどんな感じだったの？」
「前回のこと？そうねぇ。あのときもお父さんが連れて行かれて…」

☆　☆　☆

「将軍！偵察部隊より、敵が南壁方面へ二十体ほど迫っているとの報告です！」
「第三魔導中隊を南壁に送れ！東壁は魔導砲三門を起動準備！予備の弓隊を上にあげて制圧射撃！敵を近づかせるな！」
「はっ！！」
　巨大な城壁で囲われたこの城塞国家は、およそ十年に一度という周期で”敵”の襲撃を受けている。前の襲撃の日、王国軍に六人いる将軍のうちの一人だったお父さんは、その城壁の上で防衛戦の指揮を執っていたらしい。そんなお父さんのいわば”武勇伝”を、お母さんはまるでその場で見聞きしたかのように詳しく、それでいてどこか誇らしげに語ってくれる。
「今だ！！放てぇーーーっ！！」
『やん。いたっ、いたぁい。たいちょー、こっち守り堅いっぽいでーす』
『…魔導砲の充填完了前に突破は無理そうね。一時撤退よ』
　王国軍の必死の防戦が功を奏し、壁に取り付いていた何体かの敵が退いていく。高さ数十ｍという高い壁と、十二分に訓練と装備が行き届いた数千という規模の屈強な軍隊。人間が個々の力では到底敵わないような強大な相手であっても、使える力を総動員して的確に傷を負わせ、侵攻を諦めさせることでこの国を守りぬいてきた。
「陛下！！敵が退いていきます！！我々の勝利ですよ！！」
「…しかし、敵を追い返すことはできても、一体たりとも討ててさえいないのだ…再度の襲撃に備え、油断してはならぬ。」
「はっ…」
「して、我が軍の被害状況は？」
「それが…」

☆　☆　☆

「そしてなんと！前回の襲撃ではお父さんが指揮を担当した東側では兵士の犠牲者が一人も居なかったの！これは初めてのことでとっても凄いことなのよ～！」
「それは何度も聞いたってば！」
　まるで自分のことのように自慢してくるお母さんがなんだか微笑ましい。ちなみに、その功績を王様から称えられたお父さんは、今では王国軍全軍の指揮を執るとても偉い人になっていた。もしかしたら、私自身にチート級の能力があるわけじゃなくて、チート級のお父さん…の娘として転生したことがボーナスなのかもしれない。
「まぁ、だいたいそんな感じかしら。だから今回も私たちは大人しく家で待ってましょうね」
「…うん。そうだね」
　前世の記憶を取り戻してから聞けば何かわかるかもと思ったけど、既に知っていることだけだったので少し残念。今のところ何の力もなさそうな一人の少女でしかない私には、この国を救うどころかお父さんの手助けさえできないだろう。
「それじゃ片付けでも…わ、揺れが……きゃっ！！」
「アンナ！大丈夫！？」
「うっ…いてて…ちょっとふらついて頭をぶつけ…て…」
　柔らかいドアにぶつけただけなので、痛み自体は大したことない。でも、それよりも何か…頭に、心に、ざわめく感じがする。これを人は嫌な予感というのかもしれない。そう思ったら、居ても立っても居られなくなった。
「…ごめん、お母さん。ちょっと出かけてくる」
「何を言って…今は家で大人しくしてなさい！！」
「変なこと言ってるのはわかってる！！でも…でも、私にとって大切なことなの…今、行かなきゃ…！」
　こんなこと言っても普通なら止めるに決まってる。王国軍が守ってくれるとはいえ、襲撃を受けているんだし、その王国軍からは家に居ろとも言われている。何より、私みたいなのが外に出たところで邪魔になるだけだ。それでも、お母さんは。
「…アンナがそこまで主張するなんて、初めてのことだもの。わかったわ。夕飯までには帰ってくるのよ？」
「うん…約束する！！」
　私を信じてくれたのと、もしかしたら油断があったのかもしれない。いずれにしても、お母さんの承諾を得た私は、何かに導かれるかのように、裏口から家を飛び出した。目指すのは、一般人でも立ち入れて、なおかつ城壁が見渡せるあの場所だ。

☆　☆　☆

そうして十数分後、兵士たちに見つからないように隠れつつ、息を切らせながら走って登りつめた小高い丘の上から、南東側の城壁とそこで繰り広げられている戦いの様子を観察する。そこにあったのは、知識としての出来事ではなく、紛れもない壮絶な命のやり取りだった

（あれが…この国を襲う”敵”…なんて大きさなの…！）

実物を見て改めて思い知らされる、その大きさと恐ろしさ。遠くから見ているだけなのに足がすくんでしまう。それを王国軍の人たちは、最前線で追い返そうと必死になっている。例えチート級の能力があったとしても、私には怖くて出来ないかもしれない。

（でもやっぱり、見た目は…私たちと同じ女の子にしか見えない。それも、まるで”元の世界”に居た頃の、私たちみたいな）

年齢は十代から二十代まで。そして、個性豊かな…セーラー服やブレザーといった、いわゆる学生服を身に纏っている。学校が違うからか服装の統一感こそないとはいえ、彼女たちはどこから見ても、私たちの世界に居た普通の女子高生たちだった。もちろん、身長およそ三十五m程度という、その巨人としての圧倒的な体格を除いて。

『みんなどいてー。その辺の壁に一発魔法ぶち込んじゃうわ』

『ん、りょーかい』

『あはは！あんまり派手にやり過ぎないようにねー？』

そうしているうちに、女の子のうちの一人が何やら呪文のようなものを唱えだす。手のひらの前にはわかりやすくカッコいい円形の何かが描き出されていて、いかにもこれから魔法を使いますといった雰囲気だ。その周辺では暴風が吹き荒れ始め、ヒラヒラと中が見えそうになる短いスカートにドキドキしてしまう。

「敵の魔法行使を確認！！魔法大隊！防御陣の展開を急げ！！！」

「ダメです！！強大すぎて耐え切れそうにありませんっ！！」

「くそっ…！！魔導砲全門のエネルギーを魔導障壁に転換しろ！！」

数人の女の子が道を空けた先、城壁を守る王国軍の動きが慌ただしさを増していく。それを見た女の子たちはキャッキャッと楽しそうに歓談していて、私たち人間と彼女たち巨人との温度差を痛感させられる。そして、彼女が呪文を唱え終えるのと、青いバリアのようなものが二重三重に展開されたのはほとんど同時だった。

『さて、サラマンダーちゃんとノームちゃん、力を借りる

ね。ファイアストーム♪』
　歌うように奏でられたおそらくは高等呪文であろうそれは、彼女たちスケールから見ても巨大な炎の竜巻を発生させる。周囲に居た女子高生たちのスカートを舞い上げて黄色い悲鳴を上げさせながら、その竜巻は人間側が作り出している青い壁を易々と突き破っていく。
「くっ…なんて強烈な魔法だ…！！」
「ダメです！！障壁が持ちません！！」
「…城壁を破壊されるわけにはいかん…後は任せたぞ！はぁぁぁーーー！！」
　その壁が最後の一枚にまで削られようとした瞬間、城壁の上にいた一番偉い人の身体が眩く光る。それはまるで、命を燃やし尽くしているかのような、そんな一瞬の煌めき。この世界の魔法に詳しくない私でも、何が起こったのかはなんとなく想像できてしまう。
『あらら。壁壊せなかった？ざんねーん』
『ていうかこの辺暑くなってない？汗かいちゃうし他のとこ行こー』
『そうだねー。その前になんか飲みたいかも』
　城壁が少し抉れたもののなんとかその魔法攻撃を耐え抜いたことで、彼女たちは諦めて立ち去っていったようだった。懸命に戦っていた兵士たちからは鬨の声が上がっているけど、その中心部に位置する場所は勝利とは裏腹に重い空気に包まれている。
「将軍！！将軍…！！」
「最後の力を使い果たされて…我らと、この国をお守りくださったのだ…」
「偉大なる魔導将軍万歳！！！」
　それは、この戦いのほんの一端に過ぎない。この日、この国を取り囲むように襲い来る巨大な女の子たちの数は数百人を数えるという。これまで追い返し続けられたことが本当に奇跡のようで、お父さんが犠牲者を出さずに戦い終えられたこともまたそうなんだろう。この国はこれまでも、これからも、こうして続いていくんだ。
（それでも…この収まらないざわめきは…まだ何か、忘れているような…）
　自分の中にある言い知れない何かを抑え込みながら、気持ちを落ち着かせるようにして丘を下り始める。やっぱり私はただのモブでしかなくて、ここで出来ることなんてないんだろう。そう考えながら数歩歩いたとき、遠くの方からとても大きな声が聞こえてきた。
『みんなが”超えられない壁”なんて言うからどんなものかと思ったら。めっちゃ小っちゃいじゃん！』

☆　☆　☆

（う…そ……）

そのはかり知れない衝撃を受けたのは、私だけではないはず。丘の上に登るまでもなく視認できている…それの意味するところ、つまりは、壁を超えてでもその身体が見えているということに他ならない。そして彼女は、数十ｍの壁よりも高い、といった程度の大きさではなかった。

『こーんな小っちゃな壁に囲まれて安心している小人の皆さん！あたしが来ちゃったので平和な時間はおしまいでーす♪』

彼女は今、城壁の外側でしゃがみ込んだ状態でありながら、城内の街並みを見下ろしている。顔は見えないけど、同じく女子高生くらいで、これまでの巨人が小人に見えてしまうほどの大巨人。比べるものと言えば膝より下に位置している南壁くらいで、それはつまり、私たちを守るはずの”壁”が、彼女にとってはただの地面の起伏程度に過ぎないことを意味していた。

「超大型巨人の出現を確認…！かべが…壁が超えられています…っ！！」

「ただちに周辺の全軍に攻撃を集中させろ！！魔導砲も惜しむな！！」

「はっ！！」

一瞬だけ機能停止していた王国軍だったが、目の前に現れた強大な存在に対して猛攻撃を開始する。対兵器用の大槍や幾千もの矢、そして色とりどりの攻撃魔法に加えて、極めつけは青白い一筋の輝きを放つ魔導砲。この国のすべてを守るための戦いが、そこにあった。

『あははっ！ぜーんぜん効いてないでーす！でも、お返しにぃ……ふぅー♪』

「う、うわぁぁぁあああ！！」

そんな人間の抵抗を嘲笑うかのように、彼女は城壁の上に向けてその瑞々しい唇を近付けると、優しく吐息を吹き出した。さっきみたファイアストームと比べてもそん色がないほどの強烈な暴風が王国軍の兵士たちを襲い、まるで凩が木の葉を巻き上げるかのように壁の両側へと追い落としていく。

「そ、そんな…息を吹きかけられただけで精鋭守備隊が壊滅するなんて…」

「投擲装備の重装隊を前に出せ！！魔導隊は射程限界まで退避させろ！！」

「しょ、将軍！！指揮系統が滅茶苦茶にされています！！もはや統制不可能ですっ…！！」

「くそっ！！」

ニヤニヤと笑う一人の少女が、片手で髪を耳にかき上げながら地面に向かってそっと息を吐いているだけ。まるでお遊びだと言わんばかりのその行為が、これまで国を守り続けてきた歴戦の軍隊をあっけなく壊滅させていく。そんなどうしようもないほど圧倒的な力の差を見せつけられていたのは兵士たちだけではなかった。

「お、王国軍が…」

「あんな化け物、勝てっこないわ！」

「そ、そうだ！避難しなきゃ俺たちも殺されるぞ！！」

大きすぎるがゆえに、その光景は城内の至る所から簡単に見えてしまう。それは、安全だからと家に留まるように言われていた住民たちがパニックを起こすには十分だった。次々と着の身着のままの住民が家を飛び出し始めると、それは大きなうねりとなって彼女とは反対側へと流れ出す。

『おっと、小人ちゃんたちもやっと逃げ始めたのかな？でもざんねーん！この国には逃げ場なんてないんだよ～♪』

この国はそのすべてを厚く高い城壁に囲われている。それは、これまで巨人から中の人間を守るために機能していたもの。今やその外側には数百人もの巨人たちが居るため、外に出ることは不可能だろう。城壁の中だけが人間の安息地であり、そこの安全がなくなれば逃げ場などないも同然だった。

『さぁ、みんな。食べ放題の時間だよっ♪』

（……！！）

楽し気にそう呟きながら、ようやく持ち上げられた顔。その可愛らしいながらも少しだけ大人っぽい綺麗な顔を見て、私の全身に電撃の様な衝撃が走る。私はその顔を…彼女のことを知っていた。

☆　☆　☆

『はいはい、みんな順番にねー。食べ物はたくさんありますからねー』

自身は城壁の外側でしゃがみ込んだまま、”小さな巨人”たちをひょいと摘まみ上げては、彼女たちを城内の適当な場所に下ろしていく。そこに並んでいるのは、彼女たちの腰にも満たない簡素な住居の数々と、足元を縫うようにして逃げ惑っている無数の住民たち。その光景は、一瞬だけ前世で訪れたテーマパークを思い起こさせる。

『あ、いきなり女の子げっとー♪あーんっ♪』

「や、嫌っ！やめて、食べな…きゃあああ…！！」

『いいなー。私も美味しそうなこ居ないかなーっと。おっさんはプチっと潰しちゃうよー』

「く、くるな、うわ、ぎゃあ！！」
それでも実際は、阿鼻叫喚の地獄絵図だった。強者が弱者をいたぶって、エサとして捕食する。この世界の食物連鎖において、人間は頂点には立っていない。食べられる側となること。生き物が本質的に持つ恐怖心は、城内にあっという間に広まっていた。
（このままじゃ家で私を待ってるお母さんも…私には巨人を止める力なんてない。でも…！）
彼女なら、超大型巨人である彼女だけなら、もしかしたら。そんな一縷の希望が、私の中にはあった。壊滅状態の王国軍では、城壁内に何十人と送り込まれた巨人たちさえどうにも出来ないだろう。この国を救える可能性があるとすれば、私のこの記憶だけだ。

☆　☆　☆

「す、好きです！付き合ってくださいっ！」
「…へ？」
私と彼女、スミレの出会いは衝撃的なものだった。高校の入学初日、まだ桜が舞っていた、初々しい女子高生たちで溢れていた朝の通学路で。一人歩いていた私は、突然腕を掴んで引き留められたかと思えば、真っ直ぐな告白を受けたのだった。
「……えーっと、それは、恋愛的な意味で…？」
「もちろん！！貴女の顔も身体もぜんぶ好き！！今はまだ名前も知らないけど、絶対に幸せにするから！！」
ひいき目に見ても絶世の美少女といえるスミレからの熱烈な告白。当然ながら往来からは好奇の目で見られるし、なんなら嫉妬の視線まで混じっているかもしれない。正直言ってそのときの私は、女の子から告白されることを想像していなかったこともあり、あまり良い気分ではなかったと思う。
「…ごめんなさい」
「えーーーーっ！！！ダメなの！？うっそ、えーーー！！」
「ちょっと、賑やかすぎ！」
「だって、だって！あたし、こんなに美少女なのに！？断っちゃうの！？」
「いや、そんなこと自分で言う？というか、いくら美少女でも女の子同士だし…」
「むぅ。それならまずは、お友達！！そしてもし好きになってくれたら、そのときは…それならいいでしょっ！？」
「…はいはい。ないと思うけどね。それより名前は？私は…」
偶然か必然か。同じクラスになった私たちはスミレの猛

アタックもあり、親友と呼べる関係になるまでにそう時間はかからなかった。私はそれでも十分幸せだったけど、スミレはそうではなくて。そして高二の夏休み、女子校とはいえ周囲でも浮いた話が溢れる頃。私たちの関係は…もう一つ上の段階へと上ることとなる。

「好きだよ、アンナ。大好き。生まれ変わってもずーっと、離してあげないから」

「…うん。私もスミレが好き。ちょっと重いなって思うときもあるけど」

「えーーー！！愛が深いだけだよー！！」

「でも、そこも好き、かも。私も毒されちゃったなぁ」

「…えへへ。絶対離さないよ」

「はいはい。ぎゅーっと、ね」

☆　☆　☆

（…なんで忘れてたんだろう…とっても甘々で恥ずかしいけど、大切な思い出なのに）

もう一度丘の上に登って、眼下に広がる状況を注視しながら前世の記憶を整理する。どこまでも楽し気に、まるで遊びのような感覚で、街の人たちを追い立てて捕食している彼女たちには見覚えはない。覚えているのはやっぱりそれらの元凶、超大型巨人として現れたスミレのことだけだ。

『あはは。みんな楽しそうでいいな～。あたしも中に入っちゃおっかな？』

そう言って立ち上がり、その大きすぎる右足を城壁内にかざしたことで、街の一画が一転して夜のように変わってしまう。住民の悲鳴の度合いと残存する王国軍の攻撃の度合いが激しくなっていくものの、私たちが出会った頃の、十五歳くらいの見た目をしたスミレの表情は喜びに歪んでいく。

（あはは。スミレのあの表情…懐かしいなぁ。あの顔を好きだって言えるの、私くらいだと思うけど）

運動も勉強も、さらには芸術といった分野まで。大した努力をせずに常に何をやってもトップを取り続ける天才型のスミレは、同年代の秀才型の生徒たちからは快く思われていなかった。なぜなら、見た目も家柄もどこにも欠点がないようなスミレは唯一、その性格に難があったから。

『ほらほら、もっと頑張って逃げないとあたしに踏み潰されちゃうよ？まぁ、無駄な努力なんだけどね～♪』

周りの子たちが血の滲むような努力の果てに出した結果を、遊んでばかりいるスミレが悠々と超えていく。ただそれだけならまだしも、スミレは他人の努力を自身の才能だけで凌駕することに快感を覚えていた。その圧倒的な力

で、人を踏み躙ることを楽しむかのように。
（身体はとっても大きくなってるけど、中身は変わってない。あれは、私の知ってるスミレなんだ…！）
褒められた性格じゃなくっても、それは私が好きだったスミレ。彼女がその人であるというのなら、私がここに居るんだって知って欲しいし知らせたい。例え、スミレに前世の記憶がなくっても、私のことを、エサとしてしか認識されなかったとしても。
（…って、問題はどうやって認知してもらうかだよね…そもそも生き残れるかどうかって状況だし…）
今の私には、何の力もない。頼れるのは、王国軍全体の指揮を執るお父さん…ではなく、私を産むとともに引退してただの主婦になっている、元宮廷魔導士のお母さんだけだ。そのためにも、今は一刻も早く家に帰らなきゃいけない。
『ふふ。たくさん逃げる時間あげたよねぇ？でもぉ…ぜーんぶ、無駄でしたっ♪』
（…ッ…！！こんなに遠いのに、衝撃で、倒れそう…！！）
スミレが容赦なく踏み下ろした濃茶色のローファーが、市街地の一画にある数十もの建物を一瞬にしてまとめて踏み潰した。直撃を免れたはずの周辺の建物さえ、巻き起こった圧倒的な暴風によって、根底から引き剥がされていく。弱々しく展開されていた防御魔方陣は何の意味も果たせずに、住民たちはまるでゴミのように吹き飛ばされていた。
（本当に時間がない…！お願いだから…スミレ…！！）
心でそう祈りながら、ほんの少し前に飛び出してきたばかりの自宅を目指して走り出す。

☆　☆　☆

家に帰るまでの道のりは、安全とは程遠いものとなっていた。我が物顔で闊歩する巨大な女子高生たちが家々を回っては屋根を引っぺがし、中で隠れている住民たちをまるで宝探しのように見つけ出す。私は彼女たちに見つからないよう、そこら中に転がっている瓦礫に身を隠しながら、少しずつ進むしかなかった。
『きゃはは！！こんなとこ隠れても無駄なのに。美味しそうな子供を三匹も発見～♪』
『え、マジで？一匹でいいから分けて！』
そんな声に思わずハッとして見上げてみれば、私よりも遥かに幼い子供たちが家の中から摘まみ上げられていく。両親に助けを求める悲痛な泣き声をまるで甘美な音色のように聞き入りながら、用済みとなった家屋に向けて乱雑

にローファーが踏み下ろされる。そこから辛うじて漏れていたか細い大人の声は、ガラガラと崩れゆく轟音にかき消されて消えてしまった。
『しょうがないなぁ。ほら、口移しねっ♪』
『なにそれ最高じゃん。んむ、ちゅっ…』
片方の子が三人の子供をまとめて唇でやわく挟んだかと思えば、もう一人の子が腰に手を回しながら顔を傾けて唇を開き、慣れた様子でお互いの顔と顔を近付けていく。ジタバタと暴れる子供たちの抵抗は何の意味もなく、その姿は二人の唇が合わさると同時に見えなくなってしまう。もはや口移しなどただの建前であることを隠さないように、彼女たちの口づけはより激しさを増していく。
（私もスミレと、あんな風に…って、それどころじゃない！夢中になってくれてる間に、ここを通り抜けなきゃ）
色っぽく漏れる吐息と絡まり合う水音、そしてそこに微かに混ざって聞こえてくる小さな悲鳴の三重奏が、少しだけ私の足を遅らせる。私の自宅がある方角は、今のところ巨人たちの襲撃を受けている気配はない。それでも、スミレの手の届く範囲である以上それはなんの保障にもならず、きっと逃げずに私を待ってくれているお母さんのためにも急がなくてはならなかった。
『ここで小人の皆さんに素敵なお知らせです！どうやら、ここ以外の場所でもみんなが壁の中まで入り込んじゃったみたいだよ♪』
（…！！）
スミレが居ない場所では、ある程度は王国軍が巨人たちを追い返せているものと思い込んでいた。その原因が、南壁が落とされたことによるものなのか、それ以外の理由からなのか、私にそれを知る術はない。ただ一つ確かなのは、このままでは数時間と経たないうちに、私たちの国は巨人たちに喰い滅ぼされてしまうということだけ。
（お父さん…なんとか持ちこたえて…！お母さん…家に居て、私に力を貸して…！）
ただの何の力もない普通の少女として転生したはずの私は今、生まれ育った国を救うため命懸けで奔走しているのだった。

☆　☆　☆

「お母さんっ！！居るっ！？」
「…アンナ！？アンナ、無事だったのね…！！」
出た時と同じく裏口から勢いよく帰宅した私を、心配そうな顔で祈りを捧げていたお母さんが出迎えてくれる。いつもニコニコと優しく微笑んでいる印象のお母さんをこ

こまでさせてしまうなんて悪いことをしたなと思いつつも、これからするお願いはもっと心配をかけてしまうかもしれない。それでも、私にできることはすべてしなければいけないという使命感に駆られていた。
「ごめんね、私が出かけたせいで避難もできなくて。私はこの通りどこも怪我してないし元気だよ」
「そう、良かった…怖かったでしょう。いらっしゃい」
「…うん」
叱るでもなくただ優しく受け止めてくれる。そんなお母さんの優しさに身を委ねていたら、今さらになって身体がガクガクと震え出す。目の前でたくさんの人が…子供までもが殺されていく光景は、当然ながら私にも恐怖というものを植え付けていたらしい。出来ることなら、このままこうして、怖い現実なんて忘れて母の愛だけを感じていたかった。でも。
「…ねぇ、お母さん」
「なあに」
「私に、力を貸して欲しいの。元宮廷魔導士だった、お母さんの力を」
「…お母さんには、巨人を倒せるほどの力はないわよ」
「うん。でも、私にはできないこともできる。それに、お父さんだって。私たち家族が力を合わせなきゃできないことが、あるの」
ゆっくりと身体を離しながら、目を見て、強い意志を込めて、そう伝える。少しだけ考えていたお母さんは、出かけてくると伝えたときと同じように、優しく微笑んでくれた。
「…貴女を産んだとき、なぜかこう感じたの。この子はいつか、私たちの知らない何かへ…どこかへ…行ってしまうんじゃないかって」
「お母さん…」
「だとしても。貴女はれっきとした私たちの子、ドルトガルド家のアンナよ。私たちの大切な娘なんだから、家族はその願いを聞いてあげるものでしょ？」
「…ありがとう！」
手短に準備を整えた私たちは、今度こそ堂々と正面口から家を出る。もう帰ってくることはないかもしれない家に別れを告げて、たくさんの避難民の中に紛れながら、この国の中心部を目指して走り出した。

☆　☆　☆

『ここから先は通行止めでーす♪』
「きゃあああ！！」

「くそっ！反対側へ走るんだ！！」
『あはっ！単純すぎない？こっちも通すわけないじゃん♪』
「ぎぃやあああ！！！」
「いや、助けて、たすけ、いやぁぁぁ…」
（なんて酷い…私たち人間の命が、弄ばれてる…）
　たくさんの人が集まっているということは、彼女たちにとってもかっこうの狙い目ということ。まるで数が集まるまで泳がされていたかのように、数百人の集団となった私たちは数人の巨人に囲まれていた。僅かに残された逃げ道には、彼女たちが蹴り壊した建物の瓦礫が次々と雪崩れ込んでくる。狩りのように追い立てられた私たちは、彼女たちの足元で縮こまりながら恐怖に身を寄せ合うことしかできない。
『あぁ…なんかゾクゾクするぅ…食べないのはもったいないけどぉ…グッチャグチャに踏み躙ってみたくならない？』
『わかる。こんなに居るんだしちょっとくらい良いんじゃない？』
『んじゃ全員一歩分だけね？』
『おっけー』
　私たちの上で、私たち不在のまま決められる、私たちの死に方。ローファーにルーズソックスに素足まで、翳される種類はそれぞれだけど、どの足裏からも瓦礫や人間の成れの果てがボタボタと剥がれ落ちてくる。食べ物としてさえ扱われない屈辱に身を震わせたところで、私たちには彼女たちの行為を変えさせる力なんてなかった。
「お母さん…このままじゃ…」
「しっ…黙ってついて来て。絶対に手は離さないで」
　首肯と強く握り直した右手だけで返事をして、お母さんの後ろをぴったり離れずについて行く。スルスルと器用に群衆の合間を通り抜けていくのを、周囲の人たちに見とがめられることもない。元宮廷魔導士の肩書は伊達じゃないらしく、認知干渉系の高位魔法は確かに普通の人なら誤魔化せているようだった。ただ、それが巨人にも効くかどうかはお母さんとしても賭けらしい。
『それじゃいくよ？せーのっ』
『えいっ♪』
『ぐちゃあ♪』
（…ッ！！）
　そうして一斉に踏み下ろされる幾本もの巨大な足という柱たち。少しでも助かろうと押しのけ合っていた人たちは、みな等しく彼女たちの足裏へと消え、周囲へ肉片として飛び散っていた。彼女たちが全員を踏み潰すつもりでは

なかったことが幸いし、私とお母さんはなんとか生き残っている。ただそれは、踏み潰されるのではなく、食べられる側になったというだけに過ぎない。
『うわ、グロ～』
『でもなんでか美味しそうに見えるんだよねぇ。はい、あーん』
『ちょ、だからって足で持ってくんな！汚いだろ！』
『あはは。食べ物を粗末にしといて今さらでしょ。それに味は美味しいよ』
　目の前で同胞を蹂躙され、それでもなんとか生き延びようと這いずり回る私たちに、彼女たちの巨大な手や足が次々とのびてくる。ある人は力加減を間違えたのか下半身だけを押し潰され置き去りにされ、またある親子はともに摘まみ上げられたかと思えば、母親に見せつけるかのように子供だけをゆっくりと咀嚼されていく。そうして周りの人たちが次々と捕食されていくなか、私たちは気付かれることなく彼女たちの足元を通り過ぎていった。
「…なんとか、抜けたわね」
「うん、凄いよお母さん。それにしても、あんなの酷すぎる…」
「年頃の少女なんて残酷なものよ。気にしちゃダメ」
「…わかった」

　それは女子高生たちの、昼食時の一種の戯れのようなものなのかもしれない。食べているものが、流行りのコンビニスイーツか、人間かの違いというだけで。そこに、食べられる側の意思など介在しない。それが、食物連鎖という自然界の厳しい掟だった。

☆　☆　☆

「お父さん！！」
「アンナ！？どうしてお前がここに…」
「お母さんに連れてきてもらったの！それより、私たちの話を聞いて！」
「…手短にな」
　国の中心に位置する王宮の、中層階に存在する王国軍の総本部。国家の非常事態に対応すべき慌ただしいお父さんの貴重な時間をもらって、通りがけにお母さんとも話し合って考えた対策を説明する。ただの十五歳の少女の、突飛すぎる考えに過ぎないけど、これを実現する以外にこの国を救う方法は思いつかない。
「…アンナ。自分が何を言っているのか、わかっているのか」
「わかってる！！私はただの子供で何の力もなくて、お父

さんや王国兵の人たちみたいに命をかけて戦ったりもできない！でもっ…！」
　そこまで叫んだときに大きな揺れに襲われて、私だけではなく周りの人たちもみんな一斉に転げまわる。それからほとんど同時に聞こえてきた轟音が、ただならぬことが起こったことを伝えていた。そして何より、何が起こったのかは、ここに居る私たちからもよく見えている。
「しょ、将軍…北部地区が…超大型巨人によって蹂躙されています…！！」
「…スミレ…っ！」
　私たちが王宮まで移動している間に、スミレもまたこの国の外側をぐるっと回って北側へと移動していた。簡単に跨ぎ越えてしまえるはずの壁の内側を移動しないのは、きっと食べるためのエサを減らさないためだろうと、そう思っていたのに。
「住民の避難はっ！？」
「それが…超大型巨人が南壁に出現したことで、住民はおのずと北部へ殺到しており…」
「…奴の狙いはそれだったのか…！！」
　相変わらず壁の外側に居るスミレだったけど、その左手は壁の内部深くまで伸ばされている。この王宮にまで届いてしまいそうな人差し指は、〝小さな巨人〟たちを避けながら、まるでお絵かきでもするかのように地上を高速で移動していく。当然ながらそこに存在する建物も避難民も何もかもが、その細くて綺麗な指先によって消し去られていた。るんるんと鼻歌まじりに街並みを蹂躙するスミレに対して、人間ができることなどない。
「お父さん！！もう時間が…！」
「私は賛成したわよ？どちらにしても、残念ながら他に打つ手はなさそうだし…私たちの子ですもの、きっと特別なことを成し遂げてくれるって、私は信じてるわ」
「……」
　私とお母さん、二人がかりの説得なら、聞いてくれるかも。そんな甘い考えがどこかにあった。それでも、今のお父さんはドルトガルド家の優しいお父さんではなく、この国の命運を背負っている将軍という立場。迷うのは当たり前かもしれない。そう、諦めかけていたときだった。
「…将軍。聞いてやっても良いのではないか」
「陛下！」
「え、え、王様！？わ、わ…！」
　周りの人が一斉に頭を下げるのを見て、私も慌てて頭を下げる。王様の顔なんて見たことないから知る由もないけど、一瞬だけ見た立派な佇まいにはオーラのようなものがあった。今さらながら凄い場所に来てしまっているのだと、

改めて感じてしまう。
「アンナ＝ドルトガルドだったか。面をあげよ」
「えっ、あ、はいっ」
「…うむ。良い顔をしておる。ワシの孫に妃として迎えさせたいくらいだ」
「ええっ、王様！あ、陛下！そんな畏れ多い…」
「わっはっは。冗談だ。だが、冗談を言っている場合でもあるまい。ドルトガルド将軍」
「はっ」
　私の無礼な態度にも動じない器の大きな王様で良かった。そう思ってお父さんのほうを見ると、国家の忠臣の顔をしたカッコいい男の人がそこに居た。これが私のお父さんなんだと改めて誇りに思いながら、その話の行く末に耳をすませる。
「そなたとクロエの子だ。きっと何かを成し遂げる。ワシもそう信じるぞ」
「…陛下。ありがたきお言葉。ですが、アンナはまだ今日十五になったばかりの…」
「そなたが剣の誓いを立てたのはいくつだったか。ワシはその頃より、そなたを信じておるぞ」
「……御意に。では、王命を」
「既に王国軍はそなたに預けてある。娘と…家族とともに。この国を救ってみせよ」
「はっ！！」
　なにがなんだか分からないうちに、私の意見が通ったらしいということだけを朧げに理解した。喜びとともに、じわじわと責任感がこみ上げてきて、その重みに押し潰されそうになる。そんな私の両手を取ってくれたのは、ずっと変わらず優しいお父さんとお母さんだった。
「アンナ、図面を頼む。クロエは魔導隊に指示を」
「りょーかい！」
「ええ。優秀な教え子たちがまだ残ってるから安心していいわよ」

☆　☆　☆

「ふぅ…緊張する」
「大丈夫よ。きっと上手くいくわ」
　王国軍にも数えるほどしかいないらしい黒い天馬。まるでおとぎ話のような黒いペガサスを片手で操るお母さんに抱きしめられながら、ただ乗せられている私はこの後のことを考えていっぱいいっぱいになっていた。それでも、遥か遠く、眼下で繰り広げられている惨劇を意識しないわけにはいかない。

「うん…絶対に成功させて、みんなを救わなきゃ…！」
「…もう。えいっ」
「え、わわ、きゃぁあああああ！！！」
お母さんが手綱を引くと同時に、ペガサスさんがダイナミックでアクロバティックな動きで宙を舞い、前世でもジェットコースターに乗れなかった私は悲鳴をあげることしか出来ない。なんでこんなことするのと言いたいけど、口を開けば何もかもが飛び出していきそうだった。
「…ふぅ。久しぶりにやったけど気持ち良いわねー！」
「うぅ…私は逆に死にそうだよ…どうしてこんなことするの！」
お母さんのイタズラ好きはよく知ってるし嫌いじゃないけど、今はそういう状況じゃないのに。そう思って息を整えて、ようやく抗議の声をあげながら振り返ってみたら、思ったよりもずっと優しい、それでいてどこか言い聞かせるような顔をしていて。
「それはね。貴女が気負い過ぎてるからよ」
「えっ？」
「…自分がただの十五歳の少女だと思い直しなさい。まだキスだってしたことないくせに」
「そ、それはそうだけど！！でも、私がっ…」
「いい？貴女はあの子のことを、スミレちゃんのことだけを考えればいいの」
「…うん」
「世界を、国を救おうだなんて、勇者様や将軍様に任せておきなさい。女の子は、全力で恋してればいいんだから」
「……わかった。ありがとう、お母さん」
その言葉でようやく肩の荷が下りた気がする。私には大したことはできない。唯一出来るかもしれないのは、私のことを大好きな…スミレを振り向かせること。そして、この襲撃を終わらせて、国を救って、なんて、その先まで考えなくていいと、お母さんは教えてくれた。だから。
「いつでもいけるって来たわよ。あとはアンナ、貴女次第」
「うん！掲げて！私からスミレへの想いを…！！」
「ええ、いっくわよーー！！」
私の願いと祈りを込めて、陽が傾きつつある空に、隊列を組んだ天馬部隊による高度な魔法を使った色とりどりの文字が描かれていく。それは、この世界の文字ではない、前世の記憶を使ったコトバ。これが伝わるなら、きっと。

☆　☆　☆

『…えっ…なに、これ…』
それを見たスミレが驚いた顔でそう呟く。私としては、

百点満点で六十点といったところだ。こんな恥ずかしいことをしたんだから、どうせならもっとわかりやすく喜んで欲しかったのに。
『スミレ　あいしてるよ　アンナより…って、うそ…アンナも、こっちの世界に居るの…？』
「やった…！！伝わってた…！ここに、ここに居るよっ…！！」
　スミレから見れば小っちゃな点のような存在かもしれない。それでも私はここに居て、確かにスミレのことを愛してる。この気持ちは前世のものかもしれないけど、すべてを思い出した今ならもう、私の物だって言い張ってもいいはずだ。
『うぅ…アンナぁ…どこだろ…みんなの中には居なかったってことは、小人ちゃんの中に居るってことだよね…』
「私はここだってばー！！あぁ、地面を探しちゃってる…そっちには居ないよぉ！！」
　私は確かに人間…彼女からみれば小人なので、半分は正解している。まさか人間が空を飛んで、しかも目の前に居るとは想像もしないのが当然かもしれない。幾筋もの指の跡が残る北側では、急に巨大な瞳に見つめられた人々が今度は別の意味で怖がっているのだろう。
『…はっ！！探す前に食べるのやめさせなきゃ！！みんな！食べ放題終了のお時間でーす！！』
「……最後までその感じは変わらないんだね。まぁスミレらしいか」
　スミレは慌てて他の巨人たちを摘まみ上げては壁の外へと回収し始める。一部からはまだ食べ足りないと抗議の声も上がっているようだけど、そこはやはり圧倒的な力の前ではなすすべがないのは私たちと同じらしい。
「よくやったわよ、アンナ。とりあえずは、国を救えたんじゃない？」
「…うん。だと、いいな」
　壁の中、決して小さくない幾つもの殺戮の跡を残して、巨人たちが去っていく。王国軍だけでは成し得なかった彼女たちの撃退。ひとまずの成功を喜びながらも、意識はこの次へ、私にとってはもっとも重要な事柄へと向いていた。
『アンナぁ…食べないから出てきてよぉ…』
「ホント、見る影もないんだから。お母さん、お願い」
「ええ。前の世界の文字だっけ？書きやすくていいわね」
　そう思ってもらえるように、ひらがなばかりで頼んである。漢字というものもあるんだよって言えばどんな顔をされるのかな。そんな風に、少しだけ転生者っぽいことに意識を向けていると、天馬部隊の人たちが改めて文字を書き連ねてくれる。王国軍の精鋭部隊を筆談に使うなんてと、

少しだけ優越感に浸ってしまう。
『…あ、さっきの…んん？動かずに前をじっと見て、空を飛んでるから、見つめ合って…？うん。よくわからないけど、アンナのこと、絶対に見つけるよ』
「……私だって。スミレのこと見つけたんだから。見落とすなんて許さないんだからね」
「ふふっ。お熱いわねぇ」
お母さんに全部聞かれているかと思えば恥ずかしいけど、認められているようで嬉しさもある。こそばゆい思いをしながらスミレの視線に合わせる位置まで飛びあがったけど、やっぱり焦点が合ってるようには見えない。
『…あれ…？なんか小っちゃいのが飛んで…これが、アンナなの…？』
「あっちも準備できたようね。さて、意志結合の魔法はけっこうな負担よ、長くは持たないから、手短にね」
「うん。お願い」
私とスミレが見つめ合う。その瞳の大きさは全然違うけど、想いの大きさはきっと同じくらい大きいはず。そうしてお母さんが指を鳴らすと、ふわりと身体が軽くなって、意識と感覚が溶けていく。最後に考えたのは、スミレが倒れないと良いな、なんてことだった。

☆　☆　☆

「よう、アンナちゃん。いらっしゃい。今日はイチゴが安くてオススメだよ」
「あ、はい。そうですね、頼んでおいたお野菜と、せっかくなのでイチゴもください」
顔見知りの八百屋さんで紙袋いっぱいの食材を買い込んだら今日の買い出しはおしまいだ。毎日のように大量に買い込んでいたらお得意様待遇になっていたらしく、いつだって一番新鮮なものだったり少しだけ量をオマケしてくれたりと、逆に持ち運ぶのが大変になってしまうという贅沢な悩みが発生していた。
「あ…この辺り、再開発して学問区になるんだ…」
あの日からもうすぐ一か月が経過しようとしていた。街中に残された傷跡は小さくないながらも、みんなは懸命に前を向いて生きようとしている。それは、平和な世界で生きてきた私とは違う、この世界の人たちが持つ逞しさなのかもしれない。
「ただいまー。今日もオマケしてもらっちゃったー。あとイチゴを…あれ？お母さん？」
元気よく扉を開けて我が家へと戻り、いつものように帰宅の挨拶を告げる。それなのに、いつもならすぐに返って

くるお母さんの返事がないばかりか、家の中が異様に静まり返っているように感じてしまう。少しだけ不気味に感じていた私を出迎えるように、別の人物が飛び出してきた。
「お帰りアンナっ♪」
「わっ！！スミレ、来てたの！？」
「そうだよ～？ほら、ただいまのちゅーは？」
「え、でもお母さんに見られたら恥ずかし…」
「問答無用～！むちゅーっ♪」
「んむっ！！」
そう言って強引に唇を奪いながら抱きついてくるスミレ。ただの人間である私と違い、巨人族という優越種として転生した彼女は、どうやらその巨人族の中でも特別な、いわゆるチート級の能力者らしい。前世といい、天才は生まれ変わっても天才なのかと思う。でも、彼女がそうであったからこそ、今こうして抱きしめあえているわけで。
「…ん、口の中でも切った？なんか血の味が…」
「あっ……ごめん、さっき人間食べたからかも…」
「はぁ！？私に会う前に！？今度そんなデリカシーないことしたら一週間口きいてあげないからねっ！？」
「うぅ～！ごめんってばぁ！！」
彼女たち巨人族の主食とは、知っての通りに私たち人間だ。彼女たちが普段過ごしている巨人の国は私たちの世界とは時間の流れが違うので、こちら側の人間が彼女たちに喰い滅ぼされなくて済んでいるということらしい。十年に一度の襲撃も、彼女たちにとっては別の世界でお腹を満たした後の、毎日の食後のデザート感覚だったそうな。
「…まぁ、スミレにとっては食事なんだし、食べるなとは言わないけどさぁ…」
「うん！あたしも記憶を取り戻してすぐはめっちゃ混乱したんだけどね！！これがけっこうイケるんだよ～！」
「お、おう…」
「特に若い女の子が絶品でさぁ！柔らかいし甘いし、それにゆっくり食べると良い声で鳴いてくれてもう食欲をそそるのなんのって…」
「しつこーい！！！」
「ふべっ！！」
生まれて初めて手加減せずに人を殴った。厳密には人間じゃなくて巨人族だけど。少しだけ吹っ飛んだから、これで経験値とかもらえないかな。レベルアップして新しい魔法なんか覚えたりして…って、ここはそんな世界じゃないのに現実逃避をしたくなる。私もあの襲撃で何人も同年代の女友達を失ってるのだから、そんな話聞きたくなかった。
「はぁ…それより、お母さん知らない？」
「ん？あぁ、お義母さんなら…ふふ」

「え、なに、なによ？」
　さっきまで痛がるフリをして寝転がってたくせに、急にオトナっぽい笑い方をしながら近付いてくる。そういうの止めて欲しい。もっと好きになっちゃうから。いや、そうじゃなくて今はお母さんの話をね。
「…あたし、ものの大きさを自由に変えられちゃうんだよね～」
「知ってるけど…だから今こうして人間のサイズでここに居るんでしょ？というか、それが何…」
「お義母さんに伝えておいてくれる？”美味しかったです。ごちそうさま”って」
「え、なに、言って…」
　私の頭の中で点と点が繋がって、混乱が加速する。そんな私を見て余裕を崩さないスミレが唇をぺろりと一舐めする仕草が、妖艶であると同時に捕食者のそれと重なった。忘れてはいけない、彼女たちにとって、人間は食べ物であるということを。
「そんな…まさかお母さんを食べ」
「ただいまー。あら、スミレちゃん来てたの？いらっしゃい」
「はーいっ♪突然お邪魔してすみませんっ！」
「いいのよいいのよ。もう娘みたいなものなんだからいつでもゆっくりしてね」
　後ろからかけられたお母さんの声と、楽し気に返事するスミレの声が頭の上を飛び交っていく。騙したなと睨む私も、してやったり顔のスミレのニヤニヤした笑顔を結局好きだなと受け入れてしまう。
「もう…さっきの何よ、美味しかったですって、思わせぶりな」
「前に来たときごちそうになったお義母さんの手作りシチュー、美味しかったもん！やっぱり人間の感覚を思い出したからか、普通のご飯も食べたいよね～」
「はいはい。それなら今日買ってきたイチゴもあげる。好きだったでしょ？」
「～～～ッ！！アンナ、超大好き～！！！」
「ふべっ！！」
　何の特別な能力もない私だけど、大切なお父さんとお母さん、それに、恋人のスミレが居る。彼女のようにチート級の能力を持っていなくたって、私の新しい人生は、きっと特別に素晴らしいものになるんだろう。そんな予感に包まれた、なんでもない一日だった。

完

『休暇』

作：シマキ

休暇。

日々忙しく働く労働者にとっての束の間の休息。

その日だけは労働から免除され、家族とともに過ごすもの、自分の趣味にいそしむもの、非日常を味わいに旅行に出かけるものなど、思い思いの方法でリラックスをする。

雇い主側もそれを理解しており、よく働いてくれた従業員へ日頃の感謝やお礼として特別休暇や慰安旅行を贈ることもある。

バルリアから帰国した数日後のある日、王女に仕えるメイドのサクラも気まぐれな主人から唐突に休暇と旅行を与えられることになった。

それは、頬を膨らませ怒っていることをアピールしながら、エレーナ様の部屋の清掃をしていたときのことだった。

「サクラはよく働いてくれているわよね」

主人になにか言われたような気がしたが、聞こえなかったフリをして作業を続けるサクラ。

この間のエレーナ様はあまりにも酷かった。踏みにじられた王都や隣国の人々。笑いながら約束を反故にされて踏み潰されたフロリナの街とその住民たち。

犠牲になった人たちのことがサクラの脳裏をよぎる。

城に勤め始めてから一年と少し。これまでエレーナ様の気まぐれにただ振り回されてばかりだったが、何でも言われたままに従うような都合の良い存在ではないのだ。

そんな強い意志と怒りをアピールするように、いつになく反抗的に振る舞うサクラ。

他の者がこんなことをすれば、きっと数瞬後には矮小な水気のある肉片になっているだろう。

もっとも、真面目でまだ小さな少女であるサクラのその行為はまるで小動物の威嚇のようで、見ていてとても微笑ましいものでしかなかったのだが。

「サクラに休暇と旅行をさせてあげようと思うのよ」

「旅行……ですか？」

主人の思わぬ言葉に、サクラは頬の空気を抜いて言葉を返す。

「私に仕え始めてから、サクラはずっと働き詰めだったでしょう？」

自分の言動でコロコロと変わるサクラの表情の変化を楽しそうに眺めながら、エレーナは優雅に紅茶を口に含む。
高価な茶葉をエレーナ好みに調整して淹れた一級品で、サクラが用意したものだった。
お茶の用意だけに限らず、サクラの能力は総じて非常に高い。エレーナはこれまで何人かのメイドを身の回りの世話のために使ってきたが、サクラほど上手く仕事ができるメイドはいなかった。
この国では珍しい黒髪黒目の容姿だけが理由で彼女を側仕えのメイドに指名した、エレーナとしては想定外の拾い物だった。
希望を抱いてわざわざ海を渡って来た異国の少女のすべてを蹂躙する。その機会を逃したのは少々心残りだったが、今のサクラは技能とそのいじめ甲斐のある性格をあわせて、名実ともにエレーナのお気に入りのメイドとなっていた。
「それはありがたいですが、私が休んでしまうとエレーナ様のお世話をする人がいなくなってしまうので、お言葉だけいただきます。ありがとうございます」
エレーナ様の従者思いの一面におどろくサクラ。
自分の働きを評価していてくれたこと、そして自分に気遣いを見せてくれたことがひどく嬉しかった。
「フフッ。サクラは真面目なのね。でもあなたが仕える前には別のメイドが私の世話をしていたのだし、少しくらいならサクラが休んでも問題ないのよ」
まるで従者をいたわる心優しい姫が言うようなセリフに、感動を覚えるサクラ。
自分の前にエレーナの世話をしたメイド達は物理的にこの世から消え去っているのだが、そのことを知らない彼女は、その時のメイドが一時的に仕事を変わってくれるのだと納得して小さくうなずいた。
「それではお言葉に甘えさせていただきますっ！」
「馬車とホテルは私が用意しておくわ。きっとサクラなら気に入ってくれる場所だと思うわよ」
「ありがとうございます」
先程とはうってかわって、後ろ姿からも伝わって来るほど上機嫌な様子でサクラは掃除を再開する。

エレーナはそんな従者の意外に現金なところにやや拍子抜けしながらも、そんな可愛いメイドの様子を眺めながら妖しい笑みを浮かべる。
その心の中では、久しぶりのサクラ以外の側仕えのメイドでどう遊ぶか、そしてサクラの旅行先で何をして遊ぶか、たくさんの楽しい想像がはじまっていた。
そしてしばらくたった出発の日。
サクラは出発前の挨拶のため、旅行用のトランクを持ってエレーナの部屋に訪れた。

「いってきます！」
「ふふっ。きっと楽しめると思うわよ」

主人に笑顔で見送られてやや興奮気味に部屋を出た彼女が、部屋に控えていた先輩メイドの青白い表情に気づくことはなかった。
エレーナが用立てた特別豪華というわけではないが十分に上質な馬車に乗って、サクラが向かったのは隣国の都市ベルリリア。
ベルリリア王国の王都であり、この大陸の海上交易の要所であり、さらにはこの大陸での陸路と海路の最も大きな中継点でもある巨大都市だった。

滞在数日目のお昼前。温暖ですごしやすい気候とその美しい街並みから、大陸随一の観光地でもあるこの街の高台に設けられた小さな展望台に、サクラは一人佇んでいた。
この大陸では珍しい、黒い髪に黒い目を持った十代前半の女の子。
その真っ黒なロングストレートの髪をなびかせるほどの海沿いらしい強い風が吹く中、麦わら帽子を片手で抑えながらも、手すりから身を乗り出し夢中になって街並みを観察する。
その姿は年相応に可愛らしく、他の観光客は街並みよりもむしろその異邦人の少女の様子を微笑ましそうに眺めていた。
眺望を十二分に楽しむと、サクラは昼食を取るため活気に溢れた街の様子を楽しみながらホテルへ戻る。
白の外壁と真っ赤な瓦で統一された美しい街並みとそこを歩く人情深い街のひとたち。
これまでの数日間の滞在で、サクラはすっかりこの街を気に入っていた。
エレーナが手配したのは貴族も泊まるような高級ホテルのスイートルーム。
豪華な部屋で従者として振る舞うのではなく主として過ごすのは、メイドのサクラにとって貴重な体験だった。

ホテルに戻ったサクラは、そのメインレストランで顔なじみになったウェイターに案内されて席につく。
そして、海で取れたばかりの新鮮な海鮮類と、港へ他の大陸から運び込まれた香辛料や珍味を組み合わせて作られる、ベルリリアの料理を楽しんだ。

「ごちそうさまでした」

サーブしてくれた給仕に礼を言い、この大陸のマナーに則って食事に満足したことを伝えるようにナプキンを雑に畳んでテーブルの上に戻すと席を立った。
満足感に包まれながら部屋に戻る途中、ホテルのロビーに自国の特使が立っているのが目に入る。
サクラの勤める城でも見かける外務局の制服を着た彼は、必死の形相で誰かを探しているようだった。
温暖な気候で軽快な服装の人が多い中、重厚なモーニングコートを着込んだ特使は、その表情もあわさってひどくまわりから浮いていた。

「どうかしたんですか？」

サクラが声をかけると、長身の特使はその出処を探すように辺りを見回したあと、ようやく目線を下げる。
そして頭二つ分ほど低いサクラを見つけると、はっとしたように表情を引き締めた。

「失礼レディー。お見苦しいところをお見せしました。このホテルに宿泊しているとある女性へある方からの手紙を持参したのですが、どうやら留守のようでして」
「もしよければその方を探すのをお手伝いしましょうか？先日からここに泊まっているので、もしかしたら私が知っている人かも知れません」
「助かります。黒髪黒目でサクラ様と仰る女性を探している……のですが……」

目の前にいる美しいロングストレートの黒髪に愛くるしい黒い瞳を持つ少女を見つめながら、段々と声が小さくなっていく特使。
サクラにとっても思い当たる人物は一人しかいなかった。

「サクラは私ですが」

チェーンに通した指輪を胸元から取り出して、自分の身

分証にもなっている、下賜されたそれに刻まれたエレーナ様の徽章を見せる。
特使の顔に安堵の表情が広がった。
「エレーナ様からお手紙を預かっております」
「私にですか？」
サクラの知識の中では、特使は一介のメイドに手紙を届けるのにわざわざ使わされるような存在ではない。
それになにか言伝があったとしても、国交のあるベルリア国内であれば郵便で手紙を送れば届くはずだった。
そんな疑問が伝わったのか、特使は手紙を運ぶことになった経緯を説明してくれた。
「ベルリア国王殿下宛へ親書を届けるついでにと、お手紙をお預かりしております」
「そうでしたか」
ふと何かに気づいたように、懐中時計を取り出し時間を確認する特使。
外交の顔であり、相手国に失礼の無いように、そして付け込まれないようにめったに感情を見せることのない特使は恐怖に顔を歪めると、懐から封筒を取り出して押し付けるようにサクラに渡す。
「確かに渡したからなっ！」
そして怒鳴りつけるように叫ぶと、恥も外聞もなくエントランスに向かって駆け出していった。
サクラはそれを呆気にとられながら見つめていた。
「何だったんでしょう」
自室に向かいながら受け取ったものを改めて確認する。
それは、公的な手紙にも使うような立派な封筒で、エレーナ様の徽章が刻まれた封蝋がおされていた。
丁寧に手入れされたカーペット敷の豪華な階段を最上階の三階まで登り、自室のドアを開ける。
メインルームからは美しいベルリリアの街並みとその先に広がる広大な海が一望できるサクラの部屋。
そんな部屋の豪奢なソファーで封筒を開けると、上質な便箋が一枚出てきた。
「この手紙を受け取ったらメイド服に着替えてホテルの

部屋で待っていてちょうだい」

エレーナ様の外見のイメージ通りの流麗な筆致で書かれた、エレーナ様の内面のイメージ通りな傲慢な一文。

サクラは小首をかしげるも、休暇中とはいえ主人の命令を無視するという選択肢は真面目なサクラにはなかった。

ベッドルームに移動しワンピースを脱いで下着姿になると、皺にならないようワードローブに移しておいたメイド服を取り出す。

何故かエレーナ様に持っていくように言われて持参したものなのだが、嫌な予感がしたので理由は聞いていなかった。

実用性が重視された普段の仕事の時に着るメイド服とは違い、見栄えを重視したこのメイド服は公式行事に主人について参加するために用意された正装用のものだった。

王女であるエレーナの身の回り世話に責任を負い、さらにエレーナに意見することができる唯一の人間であるサクラは名実ともに王国の上級公従者の一人に数えられる。

主人の公式の仕事へ付き添うこともある上級公従者のメイドは、普段の作業着用のメイド服とは別に正装用のメイド服が与えられる。

本来であればロングスカートのメイド服になるのだが、サクラには膝上までのミニスカートのメイド服に白いレースのニーソックスが支給されていた。

最近のエレーナ様の気まぐれによる王都の混乱に、先日の多数の王都施設と南方へ向かう街道の破壊がとどめを刺し、王宮御用達の仕立て屋であっても高価な衣服を仕立てるのに必要な生地や糸が十分に入手できなかったらしい。

重厚なロングスカートの正装にも憧れはあるのだが、サクラはこれはこれで気に入っていた。

これには当初の納品予定日から遅れに遅れた上に、規定の衣装を納める事ができなかった仕立て屋の人たちを守るため、そうエレーナ様に主張する必要があったという事情も無くはなかったりするのだが。

それは、自分のメイド服を納めに城に上がった仕立て屋の主人に難癖をつけるするエレーナ様に、不機嫌アピールをしていた期間だったので必死の剣幕で抗議をすることになったときのことだった。

無事に彼を城下に返すことに成功したのは良かったのだが、サクラは感謝の言葉とともに畏怖の目線を受け取ることになった。

嫌な思い出を頭から追い出しながら、メイド服を身に着けていく。

ロングスカートの代わりに用意されたシルク地の純白のニーソックスに足を通し、ガータベルトで落ちないように固定する。
そして黒いワンピースに袖を通し、その上から純白の前掛けを羽織って腰の後ろで紐を結んだあとに、胸元のリボンを結び、よく手入れされたロングヘアーをカチューシャでまとめた。
最後に真新しい黒のヒールの付いたローファーを身につけると、どこに出しても恥ずかしくない王女様のレディースメイドが出来上がった。

「このあとはどうすればよいのでしょうか」

メイド服に着替えたものの、エレーナ様の手紙にこのあとの指示は何も書かれていなかった。
お茶でも淹れようとメインルームに戻ったとき、サクラは違和感を覚えた。
室内の豪華な調度品と部屋の窓の外に広がる展望、それ自体に変わりはない。
ただそれらを眺める自分の目線が、先程よりも高くなっているようだった。

「なにこれっ……」

脳裏に思い浮かぶのは、手のひらの中でエレーナ様と同時に巨大化させられた記憶。
あのときは比較対象がなかったので身体の大きさの変化は実感しづらかったが、確かにあのときと同じ感覚を自分の体のあらゆるところで感じていた。

「いやっ……とまってっ……！」

サクラに意思に反して巨大化の速度はだんだん上がっていく。
迫ってくる天井に頭を押さえつけられ、床に女の子ずわりの体勢でお尻をつく。
その床もサクラの体重をだんだん支えきれなくなってきたのか、ミシミシという嫌な音が段々と大きくなっていく。
頭はついに天井板を突き破り、折りたたんだ足ではおそらく家具であろう木製の何かを押し倒し破壊したような感触がしていた。
思わず振り回した手はおそらく高価であろう絵画ごと壁を突き崩し、隣の部屋が顕になる。

真っ青になったサクラだが、隣の部屋が無人なことに少し安堵したその瞬間。
壁や床、そして天井を突き破りながら自分の身体が爆発的に大きくなるのを感じた。

「きゃっ……ごめんなさいっ……」

サクラは涙目でそう叫ぶも、数日間世話になったホテルをそのスタッフや他の宿泊客ごと自分の身体が押しつぶすのを止めることはできなかった。
なんでも無い日であるはずのとある日の昼下がりのこと。
ベルリリアでも有数の由緒ある高級ホテルが、なんの前触れもなく大きな音を立てて内側から爆発するように崩れさる。
そしてその中からは、ぺたんと女の子ずわりで座り込む、百倍サイズの可愛らしいメイドさんの巨大な身体が現れた。
けれども街の人々は、突然現れた仕立ての良いメイド服を着込んだ巨大な少女にばかりに驚いてもいられなかった。
巨大なメイドがホテルを破壊しながら現れたのとほぼ同じくして、街と外の街道とをつなぐ三つの門がすべて崩れ落ち、通行ができなくなってしまったのだ。
ベルリリアは南側を海に、それ以外の三方向を頑丈な城壁で囲われた構造をしている。
城壁には円滑に交易を行う商人たちが街に出入りできるよう、北側の中央門と東西にそれぞれ一箇所ずつ、計三箇所の門が設けられていた。
すべての門で、その上部に用いられていた石材が突然巨大化し、その下の門を押しつぶしてしまったように見えた。
立て続けに起こった不可思議な現象が、街の人々を混乱の渦へ叩き込む。
最も、ベルリリアの人たちの苦難はまだまだ始まったばかりだったのだが。
眼下の小さな小人たちの右往左往する様子を呆然と眺めていたサクラ。
ふと顔を上げると、百倍の大きさとなったせいで、崩れ落ちた中央門の先に伸びる自国へとつながる街道の様子がよく見えた。
周りの木々などと比べると明らかにおかしな大きさのその人影。
温暖な気候のこの街でもよく見かけるような白のワンピースに、革製のハイヒールサンダル。

比較的シンプルなデザインながらも、ひと目に高価な素材で作られたことがわかるそれらで着飾った美少女が、街道をこちらに向かって歩いて来ているのが目に入った。
肩まで伸びるブロンドの髪、吸い込まれるような青い瞳、ワンピースから覗く白い肌に身体のラインが見える薄手のその布地越しにもみてとれる全身の無駄のない肉付き。
そんな完成された美貌を備える美少女のことをサクラは他の誰よりもよく知っている。
それに、こんな事が可能で、さらに実行するような人物は一人しかいなかった。

「エレーナ様っ！」

数日間を過ごしすっかりと気に入ってしまったこの街の住民たち。
その明るく親切な人々が、突然に街の外へと通じる全ての門が閉ざされたうえに、街の中と外に巨大な二人の少女があらわれたせいで、混乱と恐怖に染まっていく様子が今のサクラからはよく見えた。
百倍の大きさになれば、ゆっくり歩いたとしても時速三百キロメートルほど、馬車の数十倍の速さになる。
優雅に歩みをすすめる見た目だけならば美しい彼女の主人は、もう街のすぐ目の前まで迫ってきていた。
義憤に駆られ、サクラは中央門に向かって脇目も振らずに向かって走り出す。
今すぐにこんなことはやめさせなければ。
そんな一心で中央門へと続くベルリリアの目抜き通りを全速力で駆け抜ける。
百倍の大きさの彼女にとって五十メートルほどの距離があった。

「ホテルで待っていれば良かったのに、わざわざ出迎にきてくれたのね。うれしいわ」
「そんなんじゃありません！」

エレーナは数日ぶりに再開したサクラをみとめると、ふっと表情を緩める。
代わりのメイドに飽き、プチリ潰してしまったのが今朝方のこと。楽しい妄想を現実にしようと遠路はるばる歩いてきたこの国で、数日ぶりに再開したお気に入りのメイドは、相変わらず無意味に声を張り上げていた。
衛兵が周りを右往左往する崩れ落ちた中央門を挟んで対峙する、まるで女王のような風格を持った百七十メートルほどの美しい少女と、仕立ての良いメイド服を身につけ

た百五十メートルほどの可愛らしい少女。
　そんな二人の足元では、街を出入りしようとしていた、多くの旅人や商人たちの車列が突然の出来事に右往左往していたが、小さすぎる彼らの様子は、大きすぎる彼女たちの目に入っていないようだった。

「どうしてこんなひどいことをするんですか！」
「なんのことかしら？」
「とぼけないでくださいっ！」

　相対的に普段と同じサイズだからか、自分の手のひらの上にいたときよりは威勢がいいような気がする。
　少なくとも怒った小鳥から、怒った子猫くらいへ恐ろしさが数段上がっているようだとエレーナは思った。
　ただまだまだ巨大化に慣れていないからだろう。周囲に与える影響を全く自覚していないらしいサクラが、その力と犠牲に気づいた反応ときのを思わず想像してしまい、笑い出しそうになるのをなんとかこらえる。

「街を壊したのはサクラでしょう？私は何もしていないわ」
「そんなわけないじゃないですか！ ホテルは……そう言えるかも知れませんが、門を壊したのは……街の人達を困らせているのはエレーナ様じゃないですか！」
「ふふっ。でも、街をこんな風にしたのは間違いなくサクラだと思うのだけれど」

　エレーナが指差した方向。真後ろを振り返ったサクラは、頭の中が真っ白になった。
　およそ五キロほどに渡ってくっきりと刻まれた二十二メートルの小さな足跡。
　紛れもなくサクラが履いているローファーが刻み込んだものだった。
　中央門からサクラが宿泊していたホテルのあった街の中心部まで続く、ベルリリアで一番、この大陸でも随一と言っていいほど栄えていた大通り。
　サクラも到着直後にこの道を通ってそのホテルへ向かっているのだからその様子ははっきりと覚えている。
　だが、大勢の人々や多数の馬車が行き交うベルリリアの繁栄を象徴する姿は、もうどこにも残っていなかった。
　乗合馬車に荷馬車、そして貴族が乗る豪奢な馬車。そのどれもが例外なく破壊され、無事なものは残っていない。
　運が良ければ横転して馬が逃げ、乗員乗客が大怪我をしただけですんだが、その大半は中身ごとローファーに蹴散

らされ巻き込まれて木っ端微塵になるか、踏み潰されて地面のシミになっていた。
馬車のに乗っていた人たちですらそのありさまであり、生身の人間はもっと悲惨なことになっている。
つい数分前までは人間であったソレらは、原型をとどめていればかなりいい方で、バラバラの柔らかいなにかの他、他にも赤い霧になってしまったものも多くあった。
数少ない命拾いをした人たちは傷ついた自分の身体を手当することも忘れ、呆然と空を見上げていた。
地面に平らなとこはほとんど残っておらず、原型を留めない遺体があちこちに散乱し、うめき声を上げる重病人の周りを騎手を失った馬が闊歩する。
大砲を打ち合った後の戦場以上に凄惨な光景がそこには広がっていた。
そして大通りとはいえ、今のサクラにとっては平均台ほどの幅しか無い。
必然的に通りの両側に立つ建物も甚大な被害を受けていた。
オープンテラスを備えたおしゃれなカフェテリアや大きなショーウインドウを持ったブティック、重厚な外観と高い評判をもつ高級レストラン。
さらには多くの人が集まっていた乗合馬車の乗車場など、目抜き通りに出店するだけの実力と知名度を備えたベルリアの中でもトップクラスの名店や、都市機能を支える様々な重要施設が軒を連ねていたその場所。
そんな面影はもうどこにもなく、あちこちに赤い何かがついた瓦礫の山がそこにはあった。
自分の行動によって引き起こされたあまりにも甚大な被害に、膝から崩れ落ちそうになるのをなんとかこらえる。
今のサクラの一挙手一投足は、どんな些細な動作であっても街の人々にとっては凶器となるに危険なものとなる。
これ以上の被害はなんとしてでも出すわけにはいかなかった。
自分の犯した罪の大きさに目の前がだんだんと真っ暗になっていくのを感じた。

「サクラにお願いがあるのだけれど」
「なん…でしょうか……？」
「これからベルリア国王に会いに行くことになっているのだけれど、サクラもついてきてくれないかしら」
「それはメイドですのでもちろ…ん……」

あまりにも重たい罪悪感に思考力を奪われる中、言いつけられたエレーナ様の命令。

城で雑用を頼まれるのと変わらない口調に、条件反射のように返事をするサクラ。
その意味することに気づき、今にも泣き出しそうな顔を主人に向ける。

「あら、どうしたのかしら？」

いつの間にか足首ほどの高さしか無い城壁をまたぎ越し、街の中に侵入していた彼女の主人。
その楽しそうに笑う綺麗な青い瞳がそこにはあった。

「あの……その、元のお姿にもどられたりとかは……？」
「もちろんしないわ」

だってこのほうが楽しいじゃない。言外にそう言っているのが確かに聞こえた。
石造りの大きな建物が多く並ぶベルリリアの街の中でも、ひときわ大きな威容を誇るベルリア王城。
そこへ向かって歩き出したエレーナを、追いかけないという選択肢はサクラにはなかった。
混乱は広まりつつあるも、まだ無傷だった郊外の住宅地を二十二メートルの足跡に変えながらその背中を追いかけ始めるサクラ。
その最初の一歩が、四人家族を出てきたばかりの家ごとローファーの下敷きにしたのを、こみ上げるものを抑えながらも彼女の目はしっかりと捉えていた。

「そういえば、ベルリア国王といつ約束をされたのですか？」

王族同士の会談を行うには日程調整など準備に非常に時間がかかる。
けれども、サクラが休みをとりはじめた数日前の時点では、そんな話は全く無かったはずだった。

「あら、サクラの手紙を受け取ったでしょう。そのときに今日これから遊びに行くと伝えたのよ」
「ベルリア国王陛下のご予定等は確認されたのですか？」
「今日決めたんだもの。そんなことはしていないわ。それでもきちんと連絡はしてあるのだから、きっと歓迎してくれるはずよ」

特使が親書で一方的に来意を告げてからまだおそらく一時間も立っていないであろう。

あまりにも無茶苦茶なエレーナの言い分に、頭痛を覚えるサクラ。
それでも先日のバルリアことを考えれば、少しはマシになったほうなのかも知れない。
そう無理やり思い直したサクラが、ただ難癖をつけていじめるためだけにこんなタイミングで親書を出したのだと気づくのは、ほんの数分後のことだった。
最も、主人も従者もその二十五メートルのヒールサンダルと二十二メートルのローファーで王都を踏み荒らしながら登城している時点で、すでに常識も何もあったものではないのだが。
中央門から王城で向かう場合、本来であればサクラが踏み潰した目抜き通りを通って街の中心部を経由した後、有力貴族の邸宅が立ち並ぶ貴族街の中を通されたまた別の道を通って向かうことになる。
街の発展の様子を来訪者に印象づけられるよう、やや遠回りになルートになりつつもそう道が整備されていた。
それに対して二人が取ったのは門から王城へ直線的に向かうルートだった。
そこには道など無く、郊外から街の中心部、そして王城にかけて、町人が多く住む集合住宅や少し裕福な町人や商人の所有する一戸建て、そして貴族の邸宅が所狭しと立ち並んでいる。
その他にも、住民の生活を支える日用品や食料品を販売する大小様々商店や、学校や博物館、美術館といった文化施設、さらには衛兵や消防隊の待機所、役所の出張所などの公共施設も多く設置されていた。
その上を堂々と歩くエレーナと、その少し後ろに従者として付き従うサクラ。
主人が国王への謁見するのに付き添っているという意識からか、サクラの動作には日ごろのメイドとしても振る舞いがだんだん色濃く出てきていた。
これが王城の廊下であれば全く違和感はなかったであろうそのふるまいは、まるで長年付き添ったような完成された主従のそれだった。
エレーナが商館を蹴り飛ばすと、サクラはその付属の倉庫を踏み潰す。
エレーナが博物館を足跡に変えると、サクラは隣の美術館を瓦礫の山へと変える。
エレーナがある貴族の邸宅を足跡に変えると、サクラはその近くにあった同じ派閥の貴族の家を土へと還す。
住民たちは、優雅な笑みを浮かべる金髪碧眼の美少女と真剣な表情を浮かべる黒髪黒目のメイドがランダムに振り下ろす、その巨大な履物から逃れようと必死の努力を続

けていた。
数多の人と建造物を足跡に変えて二人が王城にたどりつくと、城門は固く閉ざされ、堀にかかる跳ね橋も上げられていた。
固く閉ざされた正門の前に堂々と立つエレーナとそのメイドのサクラ。
ヒールを含めて百七十五メートルと百五十五メートルの二人からは城壁の内側の更にその物陰に縮こまるように隠れる衛兵たちの姿がよく見えた。

「隣国の王女エレーナよ。手紙のとおりに遊びに来てあげたわ。ふふっ、光栄に思いなさい」

堂々と来訪を告げるエレーナ。
地上を生きる人々が全く及びもつかない超常の力を振るう、同じ人間とは思えないほどの完成された美貌を持った金髪碧眼の少女と、それに付き従う一回り小さなまだ幼く可愛らしい黒目黒髪の少女。
城門の前に立つ二人のその様子だけを見れば、白い羽衣を着た女神とそのお付きの天使が外界を訪問したように見えなくもない。
けれども、その後ろに広がる多数の死傷者と多大な建造物の被害を引き起こした二人の存在とその行為は、まるで悪魔の所業そのものだった 。
しばらく待っても門が開くどころか、城壁内をただ兵士が右往左往する以外は何も反応が無い。
サクラは主人の機嫌が段々と悪くなっていくのを感じた。

「聞こえないのかしら？それともわざと無視しているのかしら？どちらにせよ客である私に対して、とても失礼だと思うのだけれど」

唐突に告げられた、国外まで伝わるほどの悪評を持つ隣国の王女の訪問。
これから遊びにいくとだけ書かれた親書のより詳しい状況を把握しようにも、特使には逃げ出すように帰られてしまい頭を抱えるベルリアの首脳陣。
対応の協議を始めよとしたまさにその時。親書の差出人が王城へと到着してしまったようだった。

「どうやら私の言うことがわからないようね」

王族らしく、微笑みを浮かべられたまま発せられた、感情が見えづらいエレーナの声。
けれども一年以上も付き従ったメイドのサクラには、その不機嫌さが手にとるようにわかった。

「サクラ、門を開けなさい」
「……？」

従者の悲しい性として、主人が機嫌が損なわれていることに内心ビクビクとしていたサクラは、唐突に不機嫌なエレーナの矛先が向けられ一瞬反応が遅れた。

「サクラ？」
「かしこまりましたっ！」

女神のような外観をした悪魔に命じられ、天使のような風貌の使い魔が動き出す。
あわてて門の前に膝をつくサクラの百五十メートルの身体が動いた際に生じた風圧は、自身のメイド服のスカートの裾をめくり上げる。
気づいて慌てて押さえたものの、純白のニーソックスを支える、〈その下に巻きつけた白いレース地のガーターベルトがちらりと見えた。
もっとも、メイド服と合わせてエレーナからもらったやたらと装飾華美な純白のレース時の下着は地上から丸見えだったのだが、これにサクラが気づくのはだいぶ後のことだった。
そして可愛らしい顔に真剣な表情を浮かべると、文字通り開門作業を始めた。

「失礼します」

十三歳の女の子の小さな、けれど巨大な人差し指が王城の正門に襲いかかる。
馬車がすれ違えるほどの大きさのベルリア王城の立派な門。
けれど今のサクラにとってトランプのカードほどの大きさもない。
まず跳ね橋を降ろそうと指をかけ、手前に引っ張る。
人差し指の強大な力にさらされたその跳ね橋の木桁は、糸のように細いチェーンが一瞬で切れ、サクラにとって小さな轟音をたてながら堀の中に落下した。

「ご…ごめんなさい」

サクラはそれを潰さないよう慎重につまみ上げると、堀の上にかけ直す。
メイドの指があたった堀の一部は崩れち、巨大な力がかかった木桁は今にも崩れ落ちそうに歪んでいた。
そして降ろした……落ちた跳ね橋の裏にある両開きの門扉を開こうと、扉の上部に人差し指の爪をたてる。
まだ幼い少女の白くて小さな指先の、その丁寧に手入れされた爪は、まるでみかんの皮でも剥くように、木製とはいえ分厚く頑丈に作られていたはずの門扉を剥ぎ取った。
蝶番ごと門枠から外れた木製の歪んだ板は、堀にかけ直された木桁と衝突すると、木桁もろともただの木片となって堀の中へと落ちていった。
大型の破城鎚でも破るのに苦労するベルリリアの城門は、十三歳のメイドの人差し指一本であっさりと開けられてしまったようだった。

「あ…開きました……」

主人に向き直るとそう報告するサクラ。
エレーナは足元の破壊された門を確認すると、満足げに微笑んだ。

機嫌が直ったのを確認したサクラは、心のなかでホッとため息をついた。

「ふふっ。ありがとう」
「いえ……」
「中に入りましょうか」

二十五メートル革製のヒールサンダルが悠々と壊れた門をまたぎ越す。
二十二メートルのローファーもそれを追って、堀と塀をまたいで城内へと入ったいった。
そもそも、堀も塀も二人にとっては簡単に跨げる程度の大きさでしか無い。
サクラによる開門は、堀を渡る跳ね橋を崩落させ、ただ城内の人々の逃げ道を奪っただけだった。

「国王にでも会おうかと思っていたのだけど見当たらないわね。サクラ、探してもらえるかしら？」

城中に響き渡る、いつもどおり傲慢で無茶苦茶なエレーナの言葉。
それは城の人間に恐怖を、従者には疑問を与えたようだ

った。

「あの、その、どのようにして王様を探せばよろしいのでしょうか？」
「いつものように探してくれればいいのよ」
「いつものように？」

首をかしげるお気に入りのメイドにエレーナは優しくヒントを出す。

「サクラは探しものを探すの得意じゃない」
「メイドですのでたしかにそうですけど……」

サクラの非常に美しくそして賢い主人がものをなくしたことはない。
けれども面白半分で城内の重要な書類や装飾品を「遊び」に使用してそのまま放置することはよくあった。
紛失に気づいたメイド長か執事長に依頼され、城内を捜索するというのはサクラのよくある仕事の一つだった。
ちなみに見つかったときには、大抵の場合あまり考えたくない染みがついている。

「だからいつもみたいに探してくれればいいのよ」

疑問を浮かべながら見上げたエレーナの、見た目だけならば美しい瞳が見つめる先。
そこにあるのは自分のお腹の高さほどもある巨大なベルリア王城。
王城を破壊してその中にいる王族を捕らえろ。
暗にそう言っていることに気がついたサクラは顔を引き攣らせた。

「どうしたのかしら？」

固まった自分の瞳をまっすぐと見つめてくるエレーナ。
その美しい顔には早くやれと書いてあるのが見えた。
敷地の奥に建てられた中央棟と、先程サクラが無理やり開門した正門の後ろに建てられた前方棟の二つの建物から構成され、そのあいだにいくつかの渡り廊下が通された構造をしているベルリア王城。
逡巡の後、サクラは前方棟から探しものを始めることにした。
膝立ちになると、まず手始めに天井の解体に取り掛かる。
屋根裏からはすでに避難が完了していることを祈りな

がら、ゆっくりと軒下に手を入れると瓦礫が内部に落下しないよう慎重に屋根を持ち上げる。
そして主人に自分の意図が露見しないよう、できるだけ乱暴にそれを地面に投げ捨てた。
あらわになった前方棟の四階に取り残されていたのは、自分が普段着ているのとは少しデザインが違う、ベルリアのメイド服を着たメイドたちだった。
サボタージュがバレないよう、そして彼女たちを追い立てるように、けれども消してその背中に追いつかないような速度で、ドールハウスのような室内を捜索という名の破壊活動でめちゃくちゃにしていくサクラ。
サクラの手に追い立てられ、そのフロアにいたほとんどすべての人が階段室に逃げ込むその瞬間、突然サクラの背中へ衝撃が走る。
文字通りエレーナの手によるものだった。

「きゃっ」

サクラは小さな悲鳴を上げると、目の前のまだ多数の人々が残っていた前方棟にバランスを崩した倒れ込んだ。
四万トンしかないまだ成長途中のメイドの小さな身体が、王都のランドマークの一つであるその建物に容赦なくのしかかる。
まだ幼いメイドの発する可愛らしい悲鳴と、多くの行政組織の執務室や謁見の間などの来訪者を迎える部屋を備えたその建物の中にいた、不運にも今日ベルリアを訪れていた使者のや王の統治を支える多くの優秀な官僚、そしてそれらの世話をするたくさんの使用人たちが上げる絶望の叫び声。
王都で一二を争うくらいに立派だったその建物は、それらをすべてをかき消すような轟音を立てながら、黒目黒髪のメイドの身体の下でただの瓦礫の山と化した。
まだいくばかかの生存者が残っていた前方棟だった何かに、サクラは白く可愛らしい手をついて、無意識のうちにそのすべてにとどめを刺しながら身体を起こす。

「何を……」

するんですか。
突然背中を突き飛ばされたこと、そして王様を探す命令とは無関係のはずの人々の命を無意味に奪われたことに対する、抗議の言葉が途中で途切れる。
自分を見下ろす、エレーナの恐ろしいほどに整った美しい顔。

そこににじむ氷よりも冷たい感情に、サクラの背筋が凍った。

「こういったとき、王族は中央棟に避難するものなのよ？」

「そう……なんですか？」

上ずった声に慌てた表情のサクラ。

この地域の城は、自国でもこのベルリアでも似たような様式をしている。

そしてサクラは難関とされる公従者試験、つまり王城で従者を行うための知識を問う試験を優秀な成績で突破しているメイドだった。

「あなたが受けた試験にも出ているのだけれど、忘れていたのかしら？」

王様が避難するような事態を引き起こしている自覚はあるんですね。とエレーナに言い返せるような余裕はサクラには残っていない。

地元では神童と呼ばれた女の子であるサクラが自分の仕事に関わる知識を忘れるはずもなく、心優しい少女である彼女は王族を逃がそうとする一心でその知識を活用していた。

最もいる可能性が低いところから、逃げ遅れた人たちも逃げる時間を得られる程度にゆっくりと探すフリをする。

そんな自分の命令を無視した行いが、エレーナの怒りを買ってしまった。

その死ぬよりも恐ろしい事実に身体が小刻みに震えだす。

恐怖に突き動かされながら、打開策を必死に探るサクラの脳裏にフラッシュバックしてきたのは、港に観光にでかけたときに知り合った船乗りの言葉だった。

スカートが高くめくり上がるのも気にせずに、勢いよく膝をつくと、城内の豪華な庭園の一部を掘り返す。

サクラの予想通り、地面の下に掘られていた薄暗い地下通路が陽の光の下にさらされる。

それは中央棟から港に向かう、王族の緊急脱出用に掘られた避難通路だった。

親戚に建築技師がいるという、口は悪いが人の良いそのひげのおじさんが教えてくれた、王族が緊急時に船に乗って国外に脱出するために、王城と地下のトンネルで繋がっているんだという小さな建物。

横目にちらりと見えたその建物の屋根と中央棟を結ん

だその直線上のある一点が、今まさにサクラが掘り返したところだった。

「よく地下通路なんて気づいたわね」

「このあたりの地形からそうかなと思いまして」

「さすがサクラ。優秀ね」

エレーナの感心したような声。

念の為その顔色も確認するものの、そこに怒りの色がなかったことにサクラは胸をなでおろした。

そのまま地下通路を掘り起こしていくと、最初に穴を開けたところからやや王城寄りの場所に二センチ弱の小さな人影が五つほどあるのが目に入った。

小人の一団の中でひときわ豪華な装いをした男。

他の人達を率いるように振る舞い、さらにこの通路を通るような人物は一人しか考えられない。

「失礼します」

自身の力で国民や異国の民をいたぶるのが趣味なエレーナと違い、サクラに百倍サイズで行動した経験は殆どない。

そのため、アリほどの大きさの狼狽して暴れるその男を、利き手でつまみ上げること自体はとても簡単なことであったが、その力加減には想定と現実にかなりの差が発生していた。

左手の上にそっと落とされた二センチ弱の大柄な男は、十三歳のメイドの巨大な指に万力にような締め付けられ、息も絶え絶えの状態になっていた。

国王陛下を万が一にも傷つけることないよう、指にほとんど力を込めていないと思っていたサクラはその様子に不思議そうに首を傾げる。

そして、何故かニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる主人に、おずおずと手の中にいる国王であろう人物を差し出した。

しかし目線でその受け取りを拒否されるとともに、あまりに無慈悲な新しい命令を追加で受けることになった。

「そうね。サクラ、こいつを握りつぶしなさい」

「そんなっ……」

「ただのメイドに握りつぶされる。フフッ。無礼なこの男にはふさわしい最後だと思わない？」

エレーナのあんまりにもあんまりな身勝手で理不尽なセリフに表情を失うサクラ。

数日間の滞在でこの街の人達と話す機会は多くあった。
今日のベルリア王国や王都ベルリリアの発展の立役者であること、そしてその誠実な人柄から国の皆から尊敬されていたことをサクラは様々な人から聞いていた。
自分の主人と同様に優秀な頭脳を持ち、しかし主人とは正反対に自分の能力や権力を民の生活を豊かにするために使ってきた。
狼狽した様子の二センチ弱ほどの小さな男は、サクラも大いに尊敬しているそんな立派な人物だった。
恐る恐る主人の様子を伺うが、その表情に命令を取り下げてくれるような気配は微塵もなかった。

「サクラはだいぶ焦らすのね。やっぱり小人を怯えさせるのが楽しいのかしら」
「そんな事ありませんっ！」

それからしばらくの間、躊躇いを消しきれないでいたが、覚悟を決めて右手に一気に力を込めた。

「ごめんなさいっ！」

巨大で可愛らしいメイドはギュッと目と、そして手のひらを一気に握りしめる。
プチっという何かが弾け飛び散った何かで手の中が濡れるような感触と、うっすらと鉄のような匂いがした。
人の命を、しかもこの国で最も尊い人物を握りつぶしたという、あまりにも中生しい感触に茫然自失とするサクラ。
しばらくして、前掛けの後ろからハンカチを取り出すと、丁寧に真っ赤な何かを拭い取った。
まだ十三歳のサクラにはあまりに大きすぎる絶望と罪悪感に、彼女の心は擦り切れてしまっていた。
その様子にエレーナは満足そうに頬を緩めると、従者に次の命令を下す。

「次はあれを蹂躙してもらおうかしら」

エレーナが指差した先にあるのは、まだ無傷で残っていた中央棟。
異常事態で避難をした多くの人々がまだそこには残っているはずだった。

「わかり…ました……」
「そうね。そこに跨いで座ってちょうだい」

呆然とした状態で、エレーナに命じられるがままに中央棟にまたがるサクラ。
大きめの旅行かばんほどのそれは、広がったメイド服のミニスカートが作る影の中にすっぽりと収まり、部屋の中が薄暗くなる。
更に四万トンのサクラの体重が城を大きく軋ませたことで、建物の奥深くに逃げ込んだ者たちを恐怖のどん底に叩き落とした。
王族の生活空間であり、まだ国王の親族や多数の使用人が残っていたベルリア王城中央棟。
サクラのやわらかそうな太ももと股間に、ギュッとそのすべてを挟み込むように力が込められる。
ベルリリアの中で一番豪華で巨大だったその建物は、十三歳のまだ小さなメイドのミニスカートの中で、取り残された高貴な人々ごと瓦礫の山と化した。

「あ……」

股下の感触にようやく頭が回り始め、自分の行動に意識が追いつく。
理解してしまった、また王族を皆殺しにしたという罪の重さに、サクラの黒くて大きな瞳から涙が溢れはじめた。

「ふふっ。涙がでるほど楽しかったのかしら？」
「そんなわけありません！それに、どうしてこんなことするんですかっ！」
「バルリアではサクラにあまり蹂躙させてあげられなかったでしょう？」
「いえっ……その……」

声を荒げるサクラに返ってきた予想外の言葉。
ベルリリアでのエレーナ様の残酷な遊びはこれで終わりではなく、まだ始まったばかりだということ。
そして弱いものがさらに弱いものを、つまり自分がベルリアの人々を蹂躙することを主人が望んでいるということを理解したサクラ。
こみ上げてくる怒りと正義感によって喉元まででかかった抗議の声。
しかしそれはエレーナの次の言葉でその全てが恐怖で塗りつぶされた。

「だから、フロリナの街の約束を破ってしまったお詫びも兼ねて、ベルリアは全部サクラに蹂躙させてあげようとおもうの。どうかしら？」

あのエレーナ様が形だけとはいえ下手に出ている。
それだけでも恐ろしいのに、更にその提案を万が一にも拒否したときに一体どんなことになるのか。
王都から馬車で逃げ出した夫婦が惨殺された光景がサクラの脳裏にフラッシュバックする。
あの妻の代わりに自分がエレーナの巨大な指でプチっと潰される光景が容易に想像できた。

「うぅ・・・」
「あら、どうしたのかしら？」

断られるという可能性を全く考慮していないエレーナの微笑み。
どうしてこんな残虐なことを楽しそうに提案できるのか。
そして、どうしてこれが自分への詫びになるなんて言えるのか。一般人であるサクラには理解できなかった。
自分がブーツで蹴り壊したバルリアの城には数百人くらいいたらしい。
自分のお尻の下のにも同じくらいの人数がいるだろう。
自分が王城に来るまでに踏み潰した人の数は間違いなくその数倍になるはずだ。
そこからさらにどれだけの人の命を、財産を、人生を奪うことになるのだろうか。
胸元からこみ上げてくるいくつものネガティブな感情をなんとか嚥下する。
サクラに断るという選択肢はなかった。

「ありがとう……ございます……」

血の気が引いた顔でうつむくサクラを見下ろしながらエレーナは楽しそうに顔をゆがめた。
サクラの葛藤は容易に想像がつく。

「ふふっ……いいのよ。サクラのためだもの」

もしも断られたら腹いせに目の前で彼女の生まれ故郷で遊ぼうと思っていたが、それはやらずにすんだようだった。
両手で身体を抱きしめながら震える、お気に入りのメイドの様子を愉しそうに眺めるエレーナ。
サクラをベルリリアに向かわせると決めたときから考えていたことだった。

嗜虐心を掻き立てるサクラの表情と、予想通りに彼女のお気に入りとなったらしい玩具の小人と街並み。

城での妄想よりもずっと面白い現実に、エレーナは笑みを深める。

ベルリア王城は使い終わってしまったが、ベルリリアの未使用の街並みはまだまだ残っている。

かわいいメイドに与える休暇は、まだ始まったばかりだった。

〈おわり〉

『サボり』

作：ヘンリクト

人間であればどうしても気が向かないという瞬間がある。
真面目な人間はそんなときに強靭な精神力で体を動かすらしいが、羽華祢という女子高生は当たり前のようにサボることを選ぶ。
大体の場合はベッドの上でゴロゴロして過ごすだけだが、たまには外に出て遊んでみたくなることもある。
今日の羽華祢はまさにそんな気分であり、近所のコンビニに行くのと同じくらいの気軽さで世界線を跳躍し、極小の世界を訪れていた。
あらゆるものが千分の一というこの世界では、彼女は身長千七百六十メートルの超巨人として、自由気ままに振る舞うことができる。
百万人が暮らす大都市という楽しい遊び場を見つけた羽華祢は、ニーハイソックスを履いただけの足を今まさに踏み出そうとしていた。
「いい感じの建物を発〜見♪ これはショッピングモールかな？」
羽華祢の視界に捉えられていたのは周囲の建物よりも二回りほど巨大な施設だった。
二千台ほどの自動車が入り乱れる駐車場を内包したそこは、床面積二万平方メートルを超す大型商業施設であり、この日も変わらず数千の人々が詰めかけている。
また、近隣の住民たちにとっては緊急時の避難所としての側面もあることから、羽華祢の暴虐から逃れようと集まった人々によって既に一万を超す過密状態が生まれていた。
人々にとっては見上げるほど巨大で、子どもたちにとっては一日中駆け回っていられるほどの巨大なそれも、上空に翳された女子高生の足裏と比べれば貧相に見えてしまう。
羽華祢のいる港からショッピングモールまでは直線で五百メートルほどの距離があるが、いまの彼女にとってそれは一歩に満たないものであり、足元と呼んで差し支えないものだろう。
翳してやった左足はショッピングモールを完全に覆い尽くし、軽く足首を動かして風を立ててみれば施設の屋上が吹き飛んでしまう。
羽華祢があまりにも脆弱なその様子に苦笑するのと同

じ頃、ショッピングモール内では悲鳴が巻き起こっていた。大半の人々は何が起きているのか分からないまま、頭上から降り注ぐ瓦礫から身を守ろうと頭を抑えてしゃがみ込むか、意味もなく駆け回るかだ。

「今からこれをペッタンコにしま〜す！死にたい人だけ残っててねっ」

ショッピングモールの屋上にそっと足裏を触れさせてみる。

先ほどまでローファーの中で守られていたはずの左足は、今では薄い布一枚で覆われているのみだ。

触れたそばから建物が崩れ落ちるこそばゆい感触に羽華祢がビクッと足先を震わせてしまったが、それが建物内の一万人の運命を決めることになった。

ほとんど無意識のまま僅かに降下したニーソックスが、半年の歳月を費やし建築されたショッピングモールを叩き潰し、ただの砂山へと変えてしまったのだ。

力を込めるどころか、体重を乗せることすらしていないというのに、あまりにも簡単に消えてしまった。

誰一人生き残ることはなかったその場所を、羽華祢は律儀にもしっかりと踏み締め、そのまま数十メートルもの深さまでズブズブと大地に沈めていく。

宣言通りペッタンコにしてあげたのだった。

羽華祢がその場で足を持ち上げてみれば、足の形を忠実になぞった深い谷が形成されており、そこにあった建物は跡形もなく消滅していた。

「んっ。いい感じじゃん」

一万人がひしめくショッピングモールを一瞬で踏み潰した女子高生は、周囲に広がる住宅街を適当に踏み潰しながら駅を目指していた。

都市中心部に位置する大型のものと比べれば幾分も見劣りするが、それでも避難する人々が殺到し数千人の人集りが出来ている。

羽華祢が町中を歩き回ることで生じる凄まじい地響きは確かに彼らの耳に届き、そのたびにちっぽけな人々の小さな心臓は不安で押し潰されてしまいそうになる。

また、彼らが心待ちにしている電車は送電線が千切られたことによって線路の上で立ち往生してしまい、たまたま女子高生の視界に入ってしまったのが運の尽きだった。

十両編成のその電車は乗客たちがドアを開ける間もなく、ニーソックスを履いた足の親指だけで線路諸共磨り潰

されてしまい、次の瞬間には足指によって握り締められていた。

「駅で電車待ちしてるおチビさんたちに残念なお知らせが二つありま～す！」

羽華祢に話しかけられた小さな人々は一斉に空を仰ぎ見る。

そこにあるのは、濃紺で柔らかそうな丸みを帯びた巨塊であり、声の主であろう少女の顔ではなかった。

その巨塊は目測で三百メートルほどの高さで占位しているが、ときおり不気味に蠢いているようだった。

電車の残骸を握り込んだ足の指先がモゾモゾ動くのを止めた次の瞬間、指先から開放された大量の鉄と土砂が駅に降り注ぐ。

「まずね～、皆が待ってる電車は永遠に到着しませ～ん。とっても悪い女の子に見つかって足指で捻り潰されちゃったからですっ！ 残骸は返してあげますね」

上空三百メートルから降り注ぐ電車だったそれは、当然のように駅の屋根を突き破ってホームと改札周辺に蠢いていた人々を押し潰す。

あまりにも突然、あまりにも暴力的、あまりにも広範囲に渡って行われた悪戯は無数の犠牲者と負傷者を出し、駅周囲を一瞬にして血生臭い異空間へ変貌させた。

羽華祢が足指を擦り合わせてニーソックスの生地に食い込んだ小さな砂粒を振り落とすたび、小さな人々は存在しない安全地帯を求めて逃げ回ろうとした。

だが、残念なことにあまりにも人が殺到し過密状態となっているだけでなく、あちこちに巨大な残骸が振りまかれた空間では、満足に歩くことも叶わない。

物理的に逃げられないことを悟った人々は、ただただその場で立ち尽くして泣き叫ぶだけ。

「じゃあ残念なお知らせ二つ目ね。……今からみんなを踏み潰しま～す♪」

持ち上げられた女子高生の足裏が上空三百メートルから降下を始める。

考えるまでもないことだが、普通に歩くのであれば一秒も経たずに地面を踏み締めるはずの濃紺の天井がまだ宙に浮いているというのは、持ち主である少女が遊んでいるからに他ならない。

自分の足元に集まった数千の人間がどんな反応をするのか楽しみながら、無意味に怯えさせて遊んでいるのだろう。

その事実に気がつく者も決して少なくはなかったが、気付くことが出来ても出来なくても、結局のところ最期は同じ運命なのだ。

空から巨大な足裏が降り注ぐという意味不明な状況に対して、彼らはただひたすらに泣き叫ぶか、諦めて座り込むかくらいしか選択肢がなかった。

小さな駅舎とその南北に作られたロータリー、そしてその周辺に立ち並ぶ雑居ビル十数棟を巻き込みながらニーソックスが大地を踏み締めた瞬間、直前まで轟いていた数千人の悲鳴と怨嗟の声はピタリと消え、その場は静寂に包まれる。

意地悪にもその振り下ろした片足をグリグリと捻って、そこに存在していたあらゆるものを葬り去った羽華祢は、満足げに鼻を鳴らしてから線路沿いに歩を進める。

数歩ごとに小さな駅を見つけては左右の足で交互に踏み締め、ちょっと大きな駅ビルがあれば爪先で小突いて蹴散らしてやった。

線路内で停車している電車も見つけた一秒後には、通学用ニーソックスで一枚板に作り変えてやるのだ。

少なく見積もっても二万を超す人間を葬り去りながら羽華祢がやってきたのは、都市中心部に聳え立つ大型のターミナル駅。

これまで適当に踏み潰してきた小さな駅とは異なり、立派なレンガ作りをしたその駅舎は羽華祢が先ほどまで履いていた革靴とちょうど同じくらいの大きさがある。

その駅の周囲を囲うのもこれまでのような雑居ビルではなく、恐らく百メートルを超すような高層ビルが乱立しているのだから面白い。

羽華祢の顔に意地悪な笑みが浮かんでしまうのもやむを得ないことなのかもしれない。

「なんか都会っぽくなってきたね〜。そこそこ発展してるんだ。……ちっさいけど」

足元に広がる極小の世界。

もし仮に、この世界の人々と同じ縮尺で転移してくることになっていたら、この辺り一帯は羽華祢が暮らす首都である都市と遜色ないものだったかもしれない。

だが、残念ながら千分の一ではどれだけ発展していようとも、砂場で作ったお城より脆く弱々しい存在でしかなく、楽しみ方など壊すことくらいしかない。

「ちょっと背比べしてみる？」

そんなことを言って高層ビルの真横に足をそっと下ろす羽華祢。

彼女は目当ての高層ビルにこそ注意を払うが、その取り巻きのような中小のビル群は紺ソックスの下敷きとなって十数棟まとめて消し去られてしまった。

高層ビルの横に並ぶ女子高生の脚。

それだけでもあまりに異質な光景だが、高層ビルの屋上が女子高生の足首より低い位置にあることは異質を通り越して異常だった。

おまけにその光景に吹き出した女子高生が、意地悪にも高層ビルにわざと足首をぶつけたことでビルが爆散し、周囲に瓦礫を撒き散らしたのだから見るものは絶句するしかないだろう。

地表からでは首を痛くするほど見上げなければならないはずの高層建築物が、たった一人の女の子の思いつきで瞬時に粉々にされてしまうのだ。

「ごめんごめん。流石に意地悪だったね。チビはチビなりに頑張ればいいんだし、一生懸命に作ったビルが女子高生のニーソにも及ばないからって卑下しなくてもいいんじゃない？　……ふふっ」

この世界の住人たちを小馬鹿にする羽華祢は、続けて目当てにしていた大型ターミナル駅を軽々と跨ぎ越し、跨ぎ越した先で両足を揃えてから膝を曲げていく。

淡い桃色の下着に包まれた肉付きの良いお尻が、その数百分の一以下の質量しかないだろう駅舎の上空を覆い尽くす。

本来、下着を隠すはずのスカートは短く折り畳まれてその用をなしていなかった。

羽華祢がそのまま膝を曲げ続けていくことで、まだ十代でしかない少女のお尻が空からターミナル駅に接近し、パンツ生地と肌が擦れる微かな音が地表に鳴り響く。

あまりの混雑によって駅の外に取り残されてしまった人々は、自分たちの空を新たに支配したそれに視線が釘付けになっていた。

それが何であるか、その答えは明白でありわざわざ口にする者はいない。

だが、それが何故、という疑問に対する答えを持っているかは人によって様々だった。

いくら山よりも巨大な存在だとしても、自分たちと同じ

姿形をしているのだから、足を揃えて膝を曲げる理由など考えれば見当はつく。
座る。
それは人間にとって非情に基本的で、恐らくは毎日のように行う簡易な動作。
だが、それをしようとしているのが身長千七百六十メートルの巨大な女の子で、座ろうとしている場所が数万もの人々が逃げ込んだ大規模ターミナル駅というのが問題だった。
空を覆い尽くす丸い尻は、今この瞬間にも哀れな人々を数万の単位で殺害しようとしている。
どれだけ深く歴史を紐解いてもこれに匹敵するほどの虐殺は数えるほどだろう。
いや、あまりにも不条理で侮辱的であることを含めれば、過去には存在しなかったと言っていい。
「ちゃんとパンツ見てくれた～？　ほら、お尻ってこんなに柔らかいんだぞ～」
羽華祢が自らの臀部を指先で突いてみせる。
柔らかいお尻はその弾力で指先をそっと受け止めると、僅かな抵抗を示すものの、指先にされるがまま凹んだり直ったりを繰り返す。
確かに十代の女の子らしい柔らかなそれであるが、この世界の人々が同じように尻を凹ませるためにはどれだけの労力が必要なのだろうか。
少なくとも人力で達成するのは不可能と断言していいだろう。
二ミリに満たない極小生物がどれだけ結集したところで、羽華祢に存在を気取らせることすら困難なのだから。
「じゃ、今から触らせてあげるね。感謝しろよ～」
背後に向けて全身をゆっくりと倒していく羽華祢。
最初に地面に触れたのは、体を支えるために突き出した両腕だった。
右手で二棟建て高層マンションを仲良く両方とも叩き潰し、左手で巨大な看板が目印になっていた大型家電量販店を押し潰して着地する。
両手足によって支えられるようにして宙に浮いた羽華祢の巨体は、まさしく山のような大きさであり、見上げる人々に恐怖を通り越し畏敬の念を抱かせるほど。
これほどまでに巨大な一個体の生物はこの世界に誕生したことはない。

神話ですらこれほどの巨人の存在は示唆されておらず、この世界の住人達にとってこの女子高生の存在を表現できる例えは少ない。
その数少ない例の中で最も多くの人々が理解し、また適当だと信じたのは神という存在だった。
身長千七百六十メートルの女子高生が有する大自然すら気ままに蹂躙できるだけの力と、それを躊躇いなく人類に向ける残虐性は、神という例えを持ち出さねば受け入れられないほど強大で理不尽であった。

「ん〜っ、クシャクシャして気持ちいい〜！」

巨大ターミナル駅を地表の建物はもちろん、地下施設すらも巻き込んで一瞬のうちに座り潰した羽華祢。
パンツ越しに感じる脆弱な何かが弾け飛ぶ感触は想像していた以上に快感だった。
モゾモゾと接地したお尻を揺り動かし、既に原型を失った駅を更に磨り潰していると、奇跡的に尻肉の直撃を免れた人々がパンツに飲み込まれて姿を消していく。
彼らの肉体はほんの小さなシミ汚れとして羽華祢のパンツに吸収されたが、それを履く本人には最期まで気づかれることはなかった。

「あっ、そうだ！ 良いこと思い付いたっ♪」

町中に座り込んでもなお羽華祢の視線はあらゆる建物を見下ろしてしまう。
周囲にいくつか立ち並ぶ高層ビルでさえもその例外ではなく、飴細工よりも脆いそれらは女子高生の巨体を前にして怯えているかのようだった。
そのうちの一棟に狙いをつけた羽華祢は、座ったまま折り畳んでいた長い脚を開放して、ちっぽけな高層ビルを真横から蹴散らし、その奥に立ち並んでいた十数棟の雑居ビルと合わせて粉々に粉砕してしまう。
俊敏に大地を這って行く手に存在するものを全て破壊した女子高生の脚は、ニーハイソックスを履いたふくら脛と、素肌が露出する太ももに大きく分けられるが、そのどちらであっても小さな人々にとっては山脈のように見えたことだろう。
同じだけの被害をもたらしながら反対の脚も開放してみれば、ハの字型に投げ出された脚の間に町の一区画が取り残されてしまった。
取り残された区画に住む人々が左右を見渡せば、高さ百メートルを超す肌色と濃紺色の壁が数百メートルに渡っ

て都市を押し潰して鎮座しており、また自分たちを包み込む影の方角へ顔を向ければ、お行儀悪く地面に直座りした長身の女子高生がニヤニヤ笑っている。

「あはっ。たった今からここは羽華祢シティとなりま～す♪」

女子高生の股下空間。

言ってしまえばそれだけのことであるが、神の如き力を持つ女の子が宣言した以上、そこはその瞬間から羽華祢シティとなるしかない。

新たに誕生した町の人口は僅かに四千人程度でしかなかったが、その大半は駅に近い高層マンションと周囲のアパート、そして中小のオフィスビルに集中していた。

彼らは誰一人として自分たちが新たな町の住人となることを受け入れられていなかったが、周囲を見渡せば自らの置かれた危機的な状況を理解してしまう。

「羽華祢シティで暮らすのは許可制なんですよ～。で、私は誰にも許可を出してませ～ん。不法滞在は許さない方針なのでさっさと出て行ってくださいねっ♪ そうじゃないと……」

空から降り立った二本の指がビルを一棟摘み上げ、そのままスッと空へ持ち去る。

高さ五十メートル程のビルは女子高生の小さな指先が触れただけで壊れてしまいそうだったが、ようやく極小世界での遊び方に慣れてきた羽華祢が絶妙に加減することでなんとか崩れることなく形を保っていた。

もっとも、ビル内部にいた哀れな人間たちは床や壁に叩き付けられた衝撃で人間としての形を失い、物言わぬシミ汚れになってしまっていたが。

「こんな風にお仕置きしちゃうぞ」

両脚の間に閉じ込めた人々によく見えるよう、ちょうど中心部に位置するあたりで摘み上げたビルを捻り潰して見せる。

なんら抵抗する様子もなく砂に変わったビルは、女子高生が指を擦り合わせるたびにパラパラと地表に降り注いでしまう。

地上に暮らす小さな生き物たちにとってそれは命を脅かすほどの脅威であり、各地で悲鳴が巻き起こるのも当然のことではあった。

小さな人々は誰かと競い合うかのように自分たちの住処を捨て去り、座り込んで自分たちを覗き込んでいる女子高生に背を向けて走り出す。
左右に目をやれば凄まじく巨大な脚が山脈のように横たわり、背後を振り返れば女の子の上半身が非常識な大きさで聳え立っている。
そんなものを見せつけられてしまえば、嫌でも自分たちが彼女の股の間という僅かな空間の中に存在していることを理解してしまう。

「おっ、みなさん頑張って走ってますね～。……ふふっ」

小さな生き物が自分から遠ざかろうとして懸命に走る様子は滑稽であり、しばらく眺めているとついつい虐めてしまいたくなる。
そっと腰を持ち上げて地面に座り直してみれば、女子高生の体重が大地に伝播し小さな生き物を宙に弾き飛ばし、小さな建物を倒壊させる。
近くにあったマンションは衝撃と振動に耐えきれずその場で崩れ落ちてしまう。
女の子が単に座り直しただけだというのに、それだけで小さな世界は大騒ぎだ。

羽華祢の悪ふざけによって負傷した人の中には芋虫のように這い蹲ってでも逃げようとする者もいたが、そんな頑張りが報われることはなさそうだ。

「あはっ。はい、時間切れ～。不法滞在してる悪い人たちはまとめて始末しちゃいま～す♪ 羽華祢シティがなくなるのは残念だけど、正義のためだから仕方ないよね～」

少女の脚に閉じ込められていた人々は、突如として響き渡った轟音に恐れ慄く。
それとほぼ同時に立っていられないほどの地響きによって無理やりに大地に叩き付けられ、何が起こったのか分からないまま顔だけで周囲を伺う。
世界が狭くなる。
彼らのそんな馬鹿げた言葉を思い浮かべてしまうほど異質な光景が飛び込む。
左右から急速に接近している肌色の壁は、恐らく少女の太ももなのだろう。
高層ビルすら容易く薙ぎ倒して押し潰す太ももに対して、人間たちはあまりにも無力だ。
逃げても、隠れても、抗っても。
なにをしたところで少女の白く柔らかい肉の壁は意に

介することもなく人間たちを飲み込み、満足に見えもしない程度の小さなシミにしてしまう。
彼女の太ももが通過した跡には、そこに存在したはずの町並みは痕跡すら残らない。

「ほ〜ら、急がないと脚を閉じちゃうぞ〜」

嘲り笑う声が遥か天空から降り注ぐ。
本来、人間が脚を閉じることに一秒も掛かることはないというのに、この少女は逃げ惑う人々を観察して楽しむためにわざとゆっくり動いているのだろう。
その理不尽に泣き叫ぶ声が聞こえないのは、彼女の太ももが生み出す轟音によって掻き消されてしまっているからだ。
羽華祢の体からある程度の距離を取ることができた人々は、左右に迫る肌色の恐怖から抜け出すことができたが、その直後に同じような紺色の壁に磨り潰される。
彼女の履くニーソックスに包まれたふくらはぎは、太ももと比較すれば一回り以上も細いものだが、極小世界の人間にとってそれはあまりにも些細な違いでしか無い。
マンションを粉砕し、住宅街を飲み込みながら迫るニーソックスが人間の真上を通過すれば、やはりそこには何も残らないのだ。
数十秒かけてゆっくりゆっくりと閉じられた女子高生の脚は、そこに存在したはずの数千の人々と、彼らが生活していた町そのもの消し去り、その代わりにと言わんばかりにそこに鎮座する。
余韻を味わうように羽華祢が両脚を擦り合わせると、両脚に掻き集められていた堆積物すらも粉砕され、町の一区画は完全に消失した。

「ん〜、いい感じにスッキリしたぁ」

数千人を弄んだ女子高生はその場で体を捻り、四つん這いになって大都市を突き進む。
大通りを逃げる集団を見つけては左手で叩き潰し、人が建物に逃げ込むのを見つければ建物ごと右手で押し潰してやる。
眼下を見下ろしながら面白いものを探す羽華祢の視界に映り込めば、次の瞬間にはサッカー場よりも巨大な平手が降り注ぐのだ。
運良く羽華祢の視界に写らず難を逃れた者もいたが、一瞬遅れてやってくる両膝によって押し潰され、そのまま深さ数十メートルの巨穴に埋葬されてしまう。

好き放題に小さな世界を蹂躙していた羽華祢は、前方によく知った形状をした建物を見つけて意地悪く微笑む。
その周囲に立ち並ぶ住宅街を右手で数回掃き壊して接近してみれば、眼下に収めたそれが中学校であることが分かった。

「お姉さんが遊びにきてあげたよ～　出ておいで～」

羽華祢の声は校舎内に待機した四百人の生徒たちにも、体育館内に避難してきた六百人ほどの近隣住民たちにも等しく行き渡る。
真上から降り注ぐ莫大な声量は建物全体を揺るがし、振動に耐えきれなかった窓ガラスが割れ砕けて飛び散った。校舎内は一瞬にして子供たちの悲鳴で満ち溢れ、耳をすませば羽華祢にもその様子が伝わってくるほど。

「あ、無視したなっ。ふーん、そういう態度なんだね～」

羽華祢の右手が敷地の端に聳え立つ体育館へ伸びていく。
ブレザー制服の袖は地表から見上げれば逆光によって漆黒に見えるし、その巨体も相まってまるで神話世界の竜であるかのようだ。
羽華祢が小さな生き物たちを怖がらせようと五指をクネクネと曲げてみれば、それだけで小さな生き物は悲鳴を上げる。
女子高生の片手が学校の体育館を覆い尽くすと、かまぼこ型の巨大施設をその地盤ごと掴み上げ、一息に上空二百メートルまで持ち去ってしまう。
羽華祢が持ち上げたそれを軽く左右に振ってみると、小さな箱から人々の悲鳴が聞こえてきた。
面白がって何度かそれを繰り返して遊んでいたが、次第に悲鳴は小さくなっていき、やがて聞こえなくなってしまう。
羽華祢は知る由もないが、体育館内に居た人々は床や壁、天井に至るまであちこちに赤黒いシミとしてこびり付く人間だった何かに変貌していたのだ。
面白みのなくなったそれをそっと胸元に寄せてみれば、制服越しでも存在感を発する大きな乳房と体育館を比較することができる。
まるで現実味のない比較行為であったが、傍から見る者たちに女子高生のおっぱいがどれだけ巨大で強大かを思い知らせるには丁度良い。
事実、羽華祢の胸に押し当てられた体育館は制服の生地

に触れた箇所からボロボロと崩れ落ち、そのまま地表に降り注ぐかブレザー生地の繊維に囚われるかの二択を迫られた。
想像よりも感触に乏しかったことに不満を覚えた羽華祢が、手に持った玩具を胸元に押し当て、円を描くように擦り付けていけば、体育館の崩壊速度は数倍に加速し、ほとんど一瞬と呼べるほどの短時間で使い尽くされてしまった。

「ん～、まぁ、こんなもんか。……どうかな中学生諸君、私の言うことを聞く気になったかな～？」

生徒たちは自分たちの頭上で行われた行為に戸惑っていた。
女子高生が玩具で自分の胸をイジって遊んでいただけなのか、何百人が無慈悲に虐殺された蹂躙行為なのか。
だが、間近でそれを見ていた彼らにしてみれば、凄まじい轟音とともに巨大な瓦礫が降り注ぐ光景が自慰行為の前戯であるとは思えなかった。
だからこそ、これは間違いなく虐殺行為であって、それをいとも容易く引き起こすお姉さんの注意は自分たちに向けられているのだ。

出てこい。
山のように巨大で空を覆い尽くす少女の要求は非常にシンプルであり、彼らにはそれに逆らうという選択肢はなかった。
一人が席を立って校舎の外を目指せば、残りの生徒たちも競い合うかのように昇降口へ殺到し、次々に大巨人が待つ校庭に向けて走り出した。

「そうそう。良い子だね～」

黒い制服を着た中学生たちが駆け寄ってくる光景は、まるで蟻が道端の餌に集まるかのようであった。
ただ、蟻と異なる点があるとすれば彼らは人間で羽華祢と同じ知能を持っていること。
一人ひとりの顔など見えもしないが、きっと怯えていることだろう。
ついさっきまで普段どおりに学校生活を送っていたというのに、女子高生が遊びに来たことで理不尽にも死の危機に直面してしまったのだ。
そんなことを考えていると、どうしても虐めてみたくなってしまう。

「ふぅ〜」

眼下の小人たちにソッと息を吹きかけてみた。

少女の吐息によって黒いツブツブは何十とまとめて綿毛のように宙に舞い、数十メートルも先の大地に叩き付けられて動かなくなる。

巻き上がった膨大な砂塵に体を打ち据えられた生徒たちは、砂粒によって肉を抉り取られた痛みに耐え兼ねてその場で転げ回る。

無数の死体と負傷者に溢れた校庭は、もはや地獄と言っても間違いではない。

「ぷっ」

あまりにも貧弱な生き物たちの滑稽な様子に笑い出しそうになった羽華祢。

だが、軽い吐息だけで死んでしまう彼らなのだから、笑いだしてしまえばそれこそ全滅してしまうだろう。

込み上げる笑いをグッと堪えた羽華祢は、ニヤニヤ顔で中学生たちを見下ろす。

先ほどまでは恐怖に引き攣るばかりだった彼らだったが、どうやら呆然と自分を見上げる割合が増えているようだった。

上空に聳えている少女がどれだけ強大であるかを見せつけられ、絶望しているのだろう。

「ね〜、今のちゃんと見てた？ 私って体育館を持ち上げておっぱいで磨り潰したり、みんなのことを息で吹き飛ばしたりできちゃうんだよね」

たった今、見せつけられてきた異常な光景。

常人の千倍という超巨体を有する彼女にとっては気分次第でいつでもできることだが、この世界に生きる人間にとっては災害のようなものだった。

なにより、人間の命に対しての価値観が合わない。

自分たちは一人が亡くなっただけでも嘆き悲しむというのに、彼女はそれを何百という単位で平然と奪い去っていくのだ。

きっと、ここまで来る途中でも何千何万という犠牲者を出してきたことだろう。

そんなことは羽華祢に言われるまでもなく、この場の全員が想像できることだった。

「で、みんなにお知らせなんだけどさ、さっき無視され

たのムカついたから皆殺しにしちゃおうかな〜って思ってるの。……でも、死にたくないよね？」

皆殺し。

日常生活で聞ことはないはずの強烈な悪意を秘めた言葉だ。

冗談で口にすることはあっても、それを現実に恐れたことなどなかった。

だが、この身長二キロに迫る巨人が口にしたのであれば話は別だ。

難なく、そして躊躇なくそれを実行するだろうと容易に想像できてしまう。

先ほどのように息を吹きかけるだけでも、一度手を叩き付けられただけでも、自分たちは一瞬にして粉々にされてしまうのだ。

「お姉さんは優しいからチャンスをあげちゃう！」

羽華祢はおもむろにポケットからスマートフォンを取り出す。

銀色の本体にケースを付けず剥き身で使用しているためか、角の一部は塗装が剥げてしまっているようだ。

誰もが見慣れたそれもこの世界においては全長百四十メートルを誇る高層ビルのような存在であり、ちょうど小人たちが呆然と佇む校庭と同じ大きさであった。

このまま羽華祢が手を滑らせてスマホを落としてしまえば、何百という小人たちはスマホに押し潰されて悲鳴を上げる間もなく全滅することだろう。

それほどの巨体を片手で軽く握った女子高生がスマホを見せつけると、その影の下で蠢く少年少女たちは慌てて影から逃れようと周囲に散らばる。

ある程度の生徒たちが逃げ終えたのを確認した羽華祢は、ゆっくりとスマホを地面に置いた。

無機質なそれは彼らが学生生活を送っていた校舎を容易く押し潰して瓦礫の山にすると、続けて当然のように校庭の半分以上を覆い尽くしてしまう。

生き残った生徒たちはスマホによって校庭の左右に分断され、その場で呆然と校舎だったはずの瓦礫を見つめていた。

校舎の中には外に逃げ出す勇気がなく留まった者も居たはずだが、彼らの生存は絶望的。

自分たちの世界を女の子の小物が奪い去った事実に呆然としていた。

「私のスマホに触らせてあげるから、画面が自動ロックされる前にメモを開いて『ごめんなさい』って書いてみて。それができたら許してあげる。……簡単でしょ？」

多分、ロックまでは一分くらいに設定したような気がするなぁ。

意地悪な口調で制限時間を告げた羽華祢は、僅かに口角を釣り上げてしまう。

スマホに慣れていれば僅か一言を入力するだけなら一秒あれば十分であり、慣れていなくても一分も掛かることはないだろう。

誰もが簡単にできるはずの課題は、生き残った百数十名の中学生たちにとってはあまりに困難で不可能と言っていいものだった。

女子高生に急かされるようにして巨大なスマホに駆け寄った彼らは、スマホの厚みという高さ七メートルの断崖を前にして絶望するしかない。

その場で腕を伸ばそうが、飛び跳ねようが、身長の四倍以上の壁を乗り越えることは不可能であった。

極一部の者達はスマホの真横に転がる校舎だった瓦礫を足場にして、数人が協力し合うことでなんとか七メートルの壁を乗り越えて画面上部に至ることができた。

だが、そこに広がるのはサッカー場とほぼ同じ広さという大画面であり、見覚えのあるアプリのアイコンは十メートル四方の大きさで床を構成している。

女子高生が指定したメモらしきアイコンを見つけた一人がそれを指差すと、画面上によじ登った小人たちはそれに向けて懸命に駆け寄る。

だが、二十名程の生徒たちがメモアプリの床に辿り着き、小さな手で必死に大地に触れてみるもアプリは起動しない。

女の子の指一本を感知して従順に従うスマホは、数十人が命懸けで起動を試みても反応することはなく、彼らは自らがいかに矮小であるかを痛感させられる。

両手で叩いても、その場で飛び跳ねてみても、半狂乱に泣き叫びながらメモを起動させようとする彼らだったがそれは最期まで叶わない。

何の前触れもなくフッと大地の明かりが消え、一面が真っ黒に切り替わってしまった。

防犯用の自動画面ロックが働き、同時に彼らの命運が尽きたことを告げたのだった。

「プッ。プフッ。ね、ねぇあんた達さぁ、ちょっと無能過ぎじゃない……？」

口元に小さく手を当てて彼らを嘲笑う羽華祢。
大声を出して笑ってしまえば、その瞬間に小さな生き物たちは消し飛んでしまうからだ。
真っ黒になったスマホ画面の大地に呆然と佇む中学生たちは、自分たちより少し大人っぽい雰囲気の少女を見上げて言葉を失っていた。

「ま、頑張ったから許してあげるよ。……でも、早くそこからどいた方がいいよ塵カス君♪」

許してあげる。
その一言に救いを得た中学生たちはその場でへたり込んでしまう。
これまでの命の危機が去って、急速にこみ上げてきた安堵感が全身の力を奪ったからだ。
だが、彼らが安堵することができたのはほんの一瞬のこと。
突如としてスマホの大地が明るくなり彼らが驚いた次の瞬間、彼らのちっぽけな体は全身から血を吹き出して動かなくなった。
羽華祢がセットしておいたアラームが定刻通りに起動して、羽華祢にすら耳障りに思える程の爆音を響かせ、同じく羽華祢ですら持っていられないほどのバイブレーションで周囲を大地ごと震わせる。
小さな人間をイジメるために十秒ほど放置してからアラームを止めると、画面上によじ登った者はもちろん、七メートルの壁に阻まれて呆然としていた者達も巻き込まれたのか学校の敷地内に生存者はいなかった。

「あはっ、せっかく忠告してあげたのに。馬〜鹿っ♪」

中学生たちを抹殺したスマホを持ち上げた羽華祢は、そのまま手首を撚るようにしてスマホに付着した砂埃を払い落とす。
パラパラと零れ落ちる砂粒の中には犠牲者たちの遺体も混じっているようではあったが、目を凝らしてもよく見えもしなかった。
恐らく生存者がいることはないだろうが、万が一にも奇跡が起こるようなことがないように、中学校だった敷地を右手でサッと一撫でして跡形もなく消し去っておいた。

その後も極小世界の人間が作り上げたルールなど羽華祢が気にすることはなかった。
無数の雑居ビルを粉砕しながら進む先に控えるのは、この大都市の中心部に位置する超高層ビル群。
この大都市の象徴でもある商業の中心地は、真っ直ぐ迫ってくる女子高生の意地悪な笑みに怯えているかのようだった。
だが、山のように巨大な女子高生は例え四つん這いであっても音速を超える速さで移動しており、小さな人間たちに逃れるだけの時間はない。
超高層ビル群まで五百メートルという位置で立ち止まった羽華祢は、眼前に立ち並ぶ筆箱ほどの小さな箱たちがこの大都市の中心なのだという、あまりに滑稽な事実に吹き出してしまいそうだった。

「そっか。こんなのが一番大きいんだね」

最も手前に聳えていた一棟の超高層ビルにデコピンを放てば、女子高生の指先は膨大なコンクリートの塊を粉々に吹き飛ばして一瞬で消滅。
ビルの屋上に手を載せてゆっくり下ろしていけば、まるで抵抗を感じさせることもなく高層ビルは押し潰れて数千人を巻き添えにした手形に埋もれる。
そのままハエを追い払うかのようにサッと手首を捻ってみれば、それだけで三棟がまとめて吹き飛ばされてしまった。
僅か数秒。それも女子高生の片手だけでもたらされた被害は甚大であり、五棟の超高層ビル内で怯えていた数万人をあっさりと葬り去ってしまう。

「雑っ魚。……でもまぁ、おっぱいが相手なら互角に戦えるんじゃない？」

四つん這いのままお尻を突き上げることで、胸部を前方に押し出す羽華祢。
九十センチという同年代の平均を大きく超える女性の象徴は、一棟の超高層ビルとその周囲に乱立する十数棟の雑居ビル群を押し潰して大地に降臨した。
ブレザーとセーター、ワイシャツとブラジャーによって遮られた破壊の感触は僅かなものであったが、おっぱいで大都市の中心部を磨り潰す背徳感は凄まじい。
羽華祢がそのまま上半身を押し出していけば、高層ビルに接触した瞬間にそれを押し倒し、そして容赦なく下敷きにして押し潰す。

逃げ惑う人間たちは背後から迫りくる巨大な影に泣き叫びながら懸命に駆けたが、残念ながら女子高生がおっぱいを前に押し進めるほうが遥かに早い。
人間たちが生み出したあらゆる構造物を飲み込んだおっぱいは、約一キロに渡ってビル群を消し去ってからようやく動きを止めた。

「ん～、気分はいいんだけど、なんか物足りないんだよなぁ～」

早くも残り半分まで減ってしまった超高層ビル群を見渡しながらボヤく羽華祢。
彼女は上半身を起こして膝立ちの姿勢を取ると、おもむろに制服の上着を脱ぎ出した。
巨大な少女が服を脱ぐだけでも小人にとっては立っていられないほどの暴風が巻き起こり、周囲に散らばっていた数メートルもあるような瓦礫を吹き飛ばず。
脱いだ上着をどこかに置けないかとあたりを見渡すも、この極小都市に女子高生の衣服を置くことができるほど広大な土地などあるはずもない。
代わりに羽華祢の目に入ったのは、二キロほど離れた場所に聳える真っ白な外壁をした大きな建物だった。

大都市を支える中核病院として設置されたそこには、女子高生が遊び回ったせいで発生した数え切れないほどの負傷者が搬送されており、大半の人間はなんら治療をされることもなく放置されているような状態だった。

「……。……えいっ♪」

流石に病院を壊すことには抵抗を覚えたが、冷静に思い直してみればすでに数十万人を虐殺しているのだから今さら悩むこともない。
良心と背徳感の戦いは一瞬にして背徳感の勝利に終わり、女子高生は手に持った制服の上着を病院に向けて放り投げた。
重量七十万トン、一般的な飛行機の四千倍という途方もない重さの上着が空を飛んで迫ってくる光景に絶叫する人々だったが、女子高生の脱ぎ捨てた衣服に押し潰されるという惨めな死から逃れることはできなかった。
勢いよく着地したブレザー制服は、目標だった病院はもちろん、その周囲に立ち並んでいた数十の雑居ビルと数百棟の住宅街を一気に薙ぎ払った。
隕石の落下であるかのような惨状を生み出した制服は、新たな支配者としてそこに鎮座する。

「脱ぎたてだから温かいよ〜。女子高生の匂いとかみんな好きでしょ？　好きに使っていいからね〜」

小さな生き物をからかう羽華祢は、続けて自らの胸元に手を伸ばし、セーターとシャツの隙間に片手を突っ込む。

器用に指先だけでシャツのボタンをいくつか外し、続けてその奥に秘めたブラジャーのフロントホックも外してしまう。

そのまま両手を使ってゴソゴソと体内を弄るようにして、用を成さなくなったブラを取り出した羽華祢は、近くにあった超高層ビルをブラカップで覆うようにして置いてみる。

カップの片方だけならもしかして、と思わないこともあったが、当然のように極小世界の超高層ビルは女子高生のブラを支えることはできなかった。

「こっちもサービスしてあげる」

この世界の住人たちが何万人と結集したところで羽華祢のブラジャーを持ち上げることも叶わないのだ。

彼らに出来ることがあるとすれば、凄まじく巨大な女子高生の下着を見上げて絶句するか、もしくは自慰にふけることくらいだろう。

羽華祢の白く滑るような素肌を守るものはセーターとシャツだけとなり、窮屈な下着から開放されたおっぱいは先ほどよりも一回り大きく見える。

再び四つん這いの姿勢に戻ってみれば、大地に向けて垂れ下がる胸は確実に大きくなっているようであり、セーターの内側で羽華祢が動くのに合わせて揺れるようになった。

地表から彼女を見上げる小さな生き物たちは、巨大な女子高生が自慢気に乳を揺らす光景に言葉を失う。

上機嫌な女子高生が目指すのはこの都市で最も巨大な建造物であり、高さ三百メートルを超す超高層ビルはこの大都市の中心部に堂々と聳えていた。

だが。

「今からこのちっさいゴミと、私のおっぱいが戦いま〜す！　まだ中に残ってるノロマさんは、ちっさいビルが勝てますようにって頑張って祈ってれば？」

羽華祢がクスクスと小さく笑えばそれだけで三百メートルの巨大建造物は震えてしまう。

全面のガラスが砕け散り、十数基のエレベータが次々に落下し、配線が千切られたことで電気が途絶え、歪んだドアは開かなくなった。
逃げ遅れた人々は凄まじい恐怖に悲鳴を上げるが、だからといって女子高生のおっぱいに狙われたビルから逃げ出す術はない。
不安げに外に視線を向ける彼らは、自分たちの周囲がグレー色のニット生地に覆い尽くされ、ほんのりと空気が温まるのが分かった。
漂ってくる優しい匂いは、きっと彼女が使うシャンプーかボディソープの匂いだろう。
本来であれば人の気分を和らげるはずの匂いも、あまりに異質な環境に溢れていれば不気味に感じるものであった。
超高層ビルの左右に陣取った女子高生の乳房は、圧倒的な重量感でそこに存在する。
両手をそれぞれ胸に当てて胸元を押し広げた羽華祢は、胸の間に閉じ込めた超高層ビルを見下ろして鼻で笑った。
「なんか手を離した瞬間に終わっちゃいそうだねぇ～」
羽華祢が自らの胸を指先でゆっくり揉みしだく。
彼女の平均的な女性よりも一回り大きな手の平であっても、完全には支えきれないほどの巨乳。
しっとりとした柔らかさと、指先をそっと受け止める弾力。
自分の胸だというのにいつイジっても気持ちいいと思うのだから贅沢なことだった。
指先の動きに合わせてフニフニと形を変えるおっぱいを見せつけた羽華祢は、おっぱいに怯える人々の恐怖を終わらせてあげることにした。
「じゃ、試してみよっか。……バイバイっ♪」
羽華祢が自らの胸からパッと手を離すと、重力に引かれた両胸が元の位置に戻る。
言ってしまえばそれだけのことでしかないが、その間に囚われていた高さ三百メートルの超高層ビルにとっては自身の最期であった。
左右から急速に接近したそれらは、それぞれが小山のような大きさであり、人類が生み出した巨大建築物程度では比較相手にもならないほどの質量を秘めていたのだ。
跳ね返すことはおろか、一瞬たりとも持ち堪えることができなかったビルは、少女の胸元で砂となって崩れ落ち、

元あった場所に瓦礫となって積み上がる。
内部で逃げ惑っていた五千を超す人間たちも跡形もなく押し潰され、その瓦礫の一部となっていることだろう。僅かにセーターに付着した瓦礫も羽華祢が何度か手で叩けば綺麗になってしまう。
大都市のシンボルである超高層ビルは、女子高生のちょっとエッチな思いつきによってこの世界から消し去られてしまった。

「あはっ。あっけないな〜」

期待通りの働きをした自分のおっぱいに満足げな羽華祢。
その場で立ち上がって改めて周囲を見下ろしてみれば、都市の無残な光景が広がっている。
数え切れないほどの足跡が無秩序に刻み込まれ、少し離れた場所に残る巨大な丸い穴は羽華祢のお尻の跡だろう。
もちろん、今しがた蹂躙した都市中心部には大きめの建物は何一つ残っていない。
女子高生の遊び場にされてしまった大都市は、すでに半分が瓦礫の町と化していた。

「でもさぁ、それってまだ半分は無事ってことだよね」

意地悪な女子高生はキョロキョロと周囲を見渡す。
最初に彼女の目に止まったものは、中心部から少し離れた場所にひっそりと佇む公園だった。
灰色ばかりの町並みに人工的に作られた緑色の空間は、どうやら災害時の緊急避難所になっているらしく、安全地帯を求めて集まってきた数千の人々で溢れていた。
公園の周囲を取り囲むように立ち並ぶ雑居ビルによって隔離されたその空間は、真上をニーソックスの足裏に塞がれたことによって、完全に陽の光を奪われてしまった。

「えいっ」

トン、と軽く足を踏み降ろした羽華祢。
千七百六十メートルの巨体であれば、一キロ先にある大規模公園を周囲の雑居ビルごと踏み潰すなど造作もない。
まだ破壊されず元の姿を残していた町並みに二百七十メートルの足跡を生み出し、それをじっくり観察してみればあまりに滑稽な様子に笑い出しそうになった。

「ぷっ。……うん、やっぱり踏み潰すのが一番好きかも。

すごく悪いことしてるって感じがしてゾクゾクしちゃうんだよねぇ♪」

大通りを逃げ回る人々の頭上でニーソックスの指先をクネクネ曲げて煽ってみる。

靴下の遷移に付着していた瓦礫が指先の動きに合わせて零れ落ちるたび、地表の人々はその場で蹲って絶叫した。

そんな彼らを何百何千とまとめて靴下で押し潰せば悲鳴はピタリと鳴り止んだ。

天井付きの巨大なスタジアムの真横を爪先で食い破って内部に侵入させてみても、片足の半分ほども覆うことができず、スリッパの代わりにもならない。

都市の中心を流れる川に掛かっていた橋も足の指先で摘んで引き千切り、足首のスナップで何百メートルも彼方へ放り投げてしまう。

地下鉄の昇降口らしきものを見つけてみれば、その真上に駆け寄り軽く飛び跳ねてやった。

六千万トンという途方も無い体重を持つ少女が飛び跳ねたことによる衝撃は凄まじく、羽華祢の周囲一キロに渡って存在したあらゆる建物が瞬時に消し飛んでしまう。

目標にされていた地下鉄などは跡形も残らず、元の何倍も深いクレーターに沈んでいた。

衝撃波が地中を伝播したことで大都市の地下に張り巡らされていた鉄道網は呆気なく崩落し、地下に避難していた十数万人を大量の土砂が飲み込んだ。

一瞬にして、それも女子高生の悪ふざけによってもたらされた被害はあまりに甚大であり、これが大都市にとって致命傷となった。

「あははっ。皆さん大丈夫ですか〜♪ まだまだ終わらないので頑張ってくださ〜い♪」

だが、圧倒的な力に酔いしれた女子高生は止まらない。

小さな世界を当然のように蹂躙し、人々の生命と生活を踏み躙って歩き続けていく。

性別、年齢、国籍、宗教、貧富、善悪。

あらゆる人間の違いを無視して、全てを平等にニーソックスで踏み潰すのだ。

人々に出来ることは羽華祢に見つからないよう逃げ回ることばかり。

女子高生が満足して帰るまでの一時間で八十万を超す犠牲者が出たのだが、本人である羽華祢は最後まで満足げに笑っていた。

自分の持ち物であるローファーと上着を残しておけば、

それを辿ることでいつでもこの世界に遊びに来ることができる。

女子高生の遊び場にされてしまったこの世界に安息の日が訪れることは二度とないだろう。

〈おわり〉

タイトル：『巨大娘いろいろ短編集』
発行日：令和三年　十二月　三十一日
　　コミックマーケット９９
発行者：ヘンリクト
連絡先：henrikuto.jm@gmail.com
印刷所：株式会社栄光